98-281

A HOUSE OF GENTLEFOLK

A Novel

BY

IVAN TURGENEV

明治
43. 11. 2
内交

緒言

一、本書はロシヤの作家イワン・セルゲーウイチ・ツルゲーニエフ（一八一八―一八八三）が一八五八―九年の作"A House of Gentlefolk"を譯したものであるが、原語に通ぜざる譯者は已むなくガーネット及びラルストン二氏の手に成つた二種の英譯によつて重譯した。

一、此の書を譯するに當つて昇曙夢、中村星湖二氏を煩す事が多かつた。茲に深く感謝の意を表する次第である。

一、なほ扉に掲げたツルゲーニエフの顔は齋藤與里氏の筆に成つたものである。

明治四十三年九月四日

譯者識

貴族の家

ツルゲーネフ作
相馬御風譯

一

華やかな春の日は次第に黄昏の色に薄れて行つた。晴渡つた空の上に高く薔薇色をした小さな雲が幾つも見えたが、それとて何方かへ動いて行くと云ふではなく、たゞ其のまゝジッと空の緑の底深くへ沈み行くものゝやうであつた。

折柄、O―市のとある場末街に沿うた一軒の小綺麗な家の、開放した窓際に、（それは一八四二年の事であつたが）二人の婦人が座つて居た。一人は五十格好一人は七十位の老婦人であつた。

若い方の婦人の名はマリヤ・デミトリエヴナ・カリーチンと云つて、夫は一徹な癇癪持のてきぱきした負かぬ氣の男であつたが、十年も前既に此世を去つた在世の頃は地方の檢事を務めて、一時はなか〳〵敏腕の評判が高かつた。相當の教育があり、大學へまでも入つた事があつたが、餘り富裕ならぬ家に生れた爲めに、早くから世間へ出て金を拵へる必要に驅られた。マリヤ・デミトリエヴナとの結婚は、女の方から持懸けた戀仲であつた。男振は惡くはなし、才氣はありそれに氣が向けば隣分人附好くもなれる性であつた。

マリヤ・デミトリエヴナは嫁がぬ前の姓をペーストフと云つて、未だ幼少の折に兩親を亡くした。其後モスクワの或る女塾に幾年か居て、其處を出てからは〇―市から四十哩程離れたポクロヴスコーと云ふ所の、家附の領地で伯母や兄と一緒に住つた。が、間もなく兄はペテルスブルグに職を得て、伯母や妹は僅ばかりの當飼扶持で暮させた。そして伯母や妹にけちな生活をさせ通しにして居る間

に、兄は急病で生先長い此世を去つて了つた。で、マリヤ・デミトリエヴナはポクロヴスコーの領地を襲いだが、永く其處に住んでは居なかつた。初めてカリーチンと相知つてから二三日の中に最う悉皆身も魂も打込んで了ひ、さて其人と結婚して二年後には最う住慣れたポクロヴスコーを賣拂つて、他の地所と替へまでした。成程、今度の土地は收穫はずッと以前より好いのだが、風情と云つては少しもなく、おまけに住む家が無いのだ。所へ、折よくカリーチンが〇―市に家を一軒手に入れたので、夫婦は早速其處を永久の住家と定めた。周圍には廣い庭もあり、殊に一方は町の外へ開けた田舍の景色がひろ〳〵と見晴らされた。

『何も好んで、田舍へ引込む必要は無からうさ』田園生活の平安を忌嫌つたカリーチンは、こんな風に心を決込んだ。が、マリヤ・デミトリエヴナの方は胸の中で、幾度か彼の美しいポクロヴスコーを惜んだ。さゞめき流れる小川、ひろびろとした草場、さては青々とした矮林、それ等の總てに心を惹かれた。併し彼女

は、何事に付けても夫に逆らはず、世の中に對する夫の知慮分別を此上も無いものに尊敬して居た。夫婦になつて十五年目に男の子一人と女の子二人を殘して、夫は死んだ。其頃は最うマリヤ・デミトリエヴナは、O—市を去らうと云ふ氣も出ない程に、其家と都會の生活とに親しんで居た。

若い頃マリヤ・デミトリエヴナは、一個可憐なる金髪少女として常に人の口に上つたものだが、五十歳の今日でも、幾らか肌の艶が無くなり柔かでなくなつたと云ふ位で、容貌は未だ昔日の魅力を全く失ひ盡さない。性質は深切と云ふよりは寧ろ感情的で、一人前の年になつても依然女塾時代の氣風を止めて居た。自分勝手でむきになり易く、何か少しでも氣に逆らふ事があると、涙を流すことすらある。が、何事も思ふ通りに運んで誰も逆らふ者さへ無ければ、如何にも優しい人附の好い女で、其家は町中でも最も樂しい居心地の好い家に數へられて居た。可成の財産もあるが、それは夫人自身に附いた遺産よりは、夫の貯蓄に因る

方が多かつた。娘二人は手許に育てゝ居るが、息子はペテルスブルグでも第一流の官立學校へ入れてある。

マリヤ・デミトリエヴナと向ひ合つて座つて居る老夫人は、父親の妹で、其昔、夫人がポクロヴスコーで共に託しい數年を送つた伯母と云ふのは此人である名をマルファ・チモフエーヴナ・ペストフと云ひ、一風變つた性癖の女で、相手構はず思つた事をてきぱき云つて除け、どんなに切迫した境遇に居ても平氣で大束を極込んで居ると云ふ風で、癖物と云ふ通名を持つて居る。故人カリーチンが大嫌ひで、姪が其人と結婚すると直樣自分の僅な所有地に引移つて、全十年の間燻り返つた百姓小家で暮して來た。マリヤ・ヅミートリエヴナは幾分此伯母を憚つて居た。心持尖り鼻で、年にも似合はず、髪の毛が黑く眼が鋭い。身體をしやんと立てゝ、達者にチョコ〳〵歩いて、早口に疳高いリン〳〵する聲で物を云ふ。何時も白い頭巾と白い短衣を着て居る。

『お前さん何うお爲だ』突然彼女はマリヤ・デミトリエヴナに訊ねた。『何をそんなに溜息なんか吐くのさ。えゝ』

『何でもないんですよ』とマリヤは答へて『まあ綺麗な雲ですこと！』

『あれを見てお前さん、悲しくなつたのかえ』

マリヤ・デミトリエヴナは何とも答へなかつた。

『ゲデオノーヴスキーさんは何うして來ないんだらう』斯う云つてマルファ・チモフエーヴナは編針を忙しく動かす。（大きな毛の襟卷を編んで居るのだ）『あの人ならお前さんと一緒になつて、溜息も吐いてくれるだらう——でないまでも、何か又嘘話でも爲るだらうけれど』

『貴方はあの人の事と云ふと、何時も目の敵になさるのね。セルゲー・ペトロヴイチさんは立派な方です』

『立派な方！』と老夫人は嘲るやうに鸚鵡返しをした。

『それに亡くなつた良人の事をどんなに思つてくれたでせう。此頃でさへ良人のことつて云ふと、目色を變へて騒ぐぢやありませんか』

『そりやお前さん不思議は無いさ。云はゞあの男を泥溝の中から拾上げてくれた人の事だもの』とマルファ・チモフエーヴナは呟くやうに云ふ。編針は愈々忙しく動いた。

『あんな温順しい虫も殺さないやうな顔をして居てさ』と老夫人は重ねて口を切つて『それに最う好加減頭も白くなつて居る癖に、口を開くが早いか嘘八百を並べなきや、人の讒訴だ。あれで議員とか何とか云はれてるんだから呆れつちまふ。それも其筈さ、元を云へば高が田舎の坊さんの息子なんだものね』

『そりや伯母さん、どんな人にだつて缺點はあります。そりや最うあの人の弱點には違ひないけれど。それにセルゲー・ペトローヴイチさんは、是れと云つて教育らしい教育は受けて居らつしやらないし、無論フランス語もお出來なさいま

せん。でも、何と被仰つたつて矢張あの人は氣持の好い方です』

『左樣さね、あの人なら何時でも喜んでお前さんの手に接吻する。フランス語は遣へないとお云ひだけれど――そんな事は大した事ではありません。妾にしたつて、フランス語なぞでは餘り威張れも爲ないのだものね。いえ、あの人は寧その事、全く言語が遣へなかつたら猶好いのだらう。さうしたら嘘も吐くまい……おや、あの人だよ、噂をすれば、影つて云ふが、驚くぢやないかね』と往來の方を覗いて、『さあ、お前さんのお好きな人がのつし〳〵と遣つてお來でだ。何てまあひよろなんだらう。宛然鶴のやうだよ』

マリヤは亂れた髪を繕つた。マルファは皮肉らしくそれを眺めて、

『まあ何うしたの、まさか白髪なんかある筈がないと思ふけれど。さうだとするとお前さんは、パラーシユカさまの御丁見が聞いて見なけりやなるまいよ』

『本當に最う、伯母さんは何時でも……』とマリヤ・デミトリエヴナは呟いて、

指の尖で椅子の肱をコン〳〵叩いた。

『セルゲー・ペトローヴイッチ・ゲデオーノヴスキーさんです』頬邊の薔薇色をした小童が戸口へ現れて、痩高い笛のやうな聲で斯う告げた。

二

と其處へ、一人の脊の高い男が這入つて來た。きちんとした外套を著、稍短かな洋袴を穿き、灰白の鹿皮の手套を篏めて、襟飾を二つ――黑いのを上に、白いのを下に附けて居る。つや〳〵した顏、平に櫛の目を入れた髪の毛から踵の低い音のしない深靴に至るまで、身に附いた總てに鹿爪らしく禮儀正しい風がある。彼は先づ女主人に、次にマルファ・チモフエーヴナに挨拶し、さて徐ろに手套を脫いで、マリヤ・デミトリエヴナの手を二度まで恭々しく接吻してから、悠然たる態度で肱掛椅子に身を落し、指の突尖を揉合せながら、笑顏ながらに口を切つ

た。
『所で、エリサウエータさんは御元氣で……』
『はい』とマリヤ・デミトリエヴナは受けて、『彼女は庭に居りますよ』
『それからエレーナさんは？』
『レーノチカも庭に居ります。それはさうと何か變つたお話でも御座いませんの』
『いや、大有りですよ』と客は答へて、ゆる〳〵眼をしばたゞき口を窄めながら
『うむ……左樣々々、斯う云ふ話があるんです。而も頗る驚くべき話なんです。ラヴレッキー――さう、あのフエードル・イワーニチさんが來てお居でゞすよ』
『フエードヤが？』とマルフア・チモフエーヴナは叫んで、『本當に又擔ぐんぢやありませんね。貴方』
『いえ、何う致しまして、眞實です。此私がお見受け申したんですもの』

『でも、それは當にはなりません』
『フエードルさんは以前よりもずつとお丈夫さうです』とマルフア・チモフエーヴナの今の言葉が耳に入らないやうな風をして、ゲデオノーヴスキーは語り續けた。
『眞實フイオードルさんはお肥りなすつて、それに色澤も大層宜しくおなりでしてな』
『あの人が先よりも丈夫らしくなつたんですつて』とマリヤ・デミトリエヴナは一語々々に力を入れて、『あの人が丈夫さうな顏をしてますつて、そんな筈はあるまいと妾なんか思ひますけれど』
『眞實ですよ』とゲデオノーヴスキーは受けて、『他の者があの方の地位に居たとしたら、一寸世間へは顏出が出來かねると云ふ所ですがな』
『止して頂戴よ、そんな』とマルフア・チモフエーヴナは割つて入り、『つまら

ない事を被仰るぢやありませんか、あの人があの人の生れ故郷へ歸つて來るんだもの――それをお前さん達は何處へ追遣ると云ふの。それに何か、あの體面に拘る事があるやうにお云ひだけれど、妾にはそれが呑込めません』

『さうぢやありませんか貴女、妻の不行跡は何時も夫たるものゝ體面に關する、それが當然です』

『そりや、貴方が未だ、自分で結婚なすつた事が無いから云へる事です』

ゲデオノーヴスキーは强ひて笑顔を造りながら、その言葉を傾聽した。

『甚だ穿鑿好きのやうで失禮ですが』と暫く口を噤んで居た後で彼は斯う訊ねた。

『其美しい襟飾は何方へのお心立で？』

マルフア・チモフエーヴナはぢろりと其方を睨んだ。

『是れはね』と受けて、『是れは其の、影口なんか利かず、面なんか被らない、嘘なんか云はない、若し此世にそんな人があるなら、さう云ふ人の爲めなんですよ

それはさうと、フエードヤの事なら妾には好く分つてます。彼に惡い所があるなら、それは無暗と、妻に好く爲過ぎたと云ふ位の事です。眞實彼は、迷つてあの女を貰つたんだもの、何うせ思合つた仲に好い事がありやしない』老夫人は斯う云足して、マリヤ・デミトリエヴナの方を横目で睨みながら席を立つた。

『さあ〳〵貴方、御勝手に誰の惡口でも被仰いよ。何んなら妾の事でも構ひません。妾最う參ります、是れで最うお邪魔は致しませんよ』斯う云捨てゝマルフアチモフエーヴナは出て行つた。

『何時もあゝなんですよ』とマリヤ・デミトリエヴナは伯母の昔後影を見送りながら云つた。

『貴方の伯母樣は、まあ、あのお年で・・・堪りませんな』とゲデオーノヴスキーは應じて、『あの方は、面なんか被らぬ男と云ふやうな事を被仰いましたけれど、併し、今の時世に果して僞善的でない者が何處かにあるでせうか。今の時世と云ふ

のは、竟り吾々の生活して居る現代の事です。私の友人の一人ですが、至極有爲な人物で。無論地位も卑しからぬ男です。其男が何時もこんな事を云ふのですよ今の時代では鷄が一粒の穀物を食ふにさへ外見を作らずに、竟り面を被らずには遣れない――奴等の遣口を見て居ると、何時も一方から餌の方へ巧に近寄つて來る、斯う云ふのです。ですが夫人、私は貴女に對しては眞實、女神のやうな聖いお心を認めるのです。何うぞ其の雪のやうに白いお手に接吻をさせて戴きたいですな』

マリヤ・デミトリエヴナは輕く頬笑んで、むつちりと小肥りした手を小指だけ横へ放して差出した、客はそれに唇を押當てた。と、夫人は自分の椅子を客の方へ引寄せ、心持身體を其方へ屈めて、小聲で訊ねた――

『では貴方は、あの人にお遇ひになつたんですね。眞實あの人はお話のやうに丈夫で愉快さうでしたの？』

『さうです、如何にも丈夫さうでもあり、愉快さうでもおありでした』と、ゲデオノーヴスキーも小聲で答へた。

『あの人の妻は今何處に居るかお聞きになりませんでしたか』

『先頃まではパリーに居たんですが、今はイタリーの方へ行つてるさうです』

『本當に險呑ですわね――フエードヤは。何うしてあの人は平氣で居られるんせう。そりやどんな人だつて不幸な事はあるでせうけれど、あの人のは、まあ云はゞヨーロッパ中の人の口の端に懸るやうになつて了つたんですもの』

ゲデオノーヴスキーは太息を吐いて、

『左樣、眞實さうですね。御承知の通り、あの女は藝術家と云はず音樂者と云はず、諺の通り、海の者も山の者も知らない者は無いと云ふ話ぢやありませんか。眞實羞恥の念なぞは藥にしたくも無くなつたんですね』

『眞實情無くなつちまひます』とマリヤ・デミトリエヴナは云つて、『何しろ親

戚の事ですからね。御存じでもありませうが、ねえ貴方、あの人はあれでも妾達には遠い從弟に當つてるんです』

『勿論ですとも。一體此方のお家に關した事は、一切私が存じてる事は萬々御承知の筈ぢやございませんか』

『あの人は妾達に遇ひに來るでせうか——何んなものでせう』

『其筈でせう。縱し後には自分の田舍へ歸られる御意にした所で』

マリヤ・デミトリエヴナは上眼遣ひをして、

『ねえ、セルゲー・ペトローヴイチ！妾つくづく女と云ふものは身の行を、愼まなければならないものだと思ひますよ』

『女にも種々ありますからな。中には運惡く浮氣に生れ付いた上に、年頃になつてからの躾の善くないと云ふ風なのも隨分あります』（斯う云つてセルゲー・ペトローヴイチは、衣嚢から靑い格子縞の手巾を引出して、それを擴げ初めた）『眞

實さう云ふ女が隨分あるのです』（茲でセルゲー・ペトローヴイチは手巾の端で眼を一つ〳〵撫でた）『ですが概して考へて見ますと、竟り……街の塵埃は今日では眞實格別ですからね』と彼は話を結んだ。

『母さま、母さま』十一に成る可愛らしい女の子が、斯う叫びながら部屋へ駈込んで來た。

『ウラヂーミル・ニコラーウイチさんがお馬に乘つて被來つてよ』

マリヤ・デミトリエヴナは立上つた。セルゲー・ペトローヴイチも起つて挨拶をした。『是れは〳〵お孃さま』斯う彼は云つて、愼重な態度で隅の方へ退き、長い眞直な鼻から鼻汁を擤んだ。

『そりや立派なお馬なのよ』と少女は言葉を繼いだ。『たつた今門の所へ彼來つたばかしよ、そしてお姉さまと妾に、上り段の所まで行つて馬を降りるからつて被仰つたのよ』

と、蹄の音がして、美しい栗毛の馬に乗つた溫乎たる貴公子が往來へ姿を現し
やがて開放した窓の前に止つた。

三

『今晩は！』愉快なはつきりした聲で青年が呼懸けた。『新しく手に入れたんです
が此馬お氣に入りませんか』

マリヤ・デミトリ エヴナは窓際へ行つて、

『彼入いまし。まあ何て好いお馬でせう。何所でお求めでしたの』

『軍隊の請負人から買つたんですが……奴さん何うも酷く吹きましてな』

『名は？』

『オルランドーと云ふんですが……馬鹿げた名ですから更へやうと思つてるんで
す……エー ピアン、エー ピアン、モン ガルゾン（おいおいこら）……何うも騒

がしい奴で仕方ありません』

馬は嘶いて地を蹴り泡を吹いた。

『レーノチカさん、撫でゝ遣つて頂戴。一寸も怖かありませんよ』

少女は窓から手を出したが、オルランドーは不意に飛上つた。馬上の人は泰然
たる態度で、馬の首に鞭を當て、兩足をしつかりと締寄せて、逆らふ馬を無理に
窓下へ立たせた。

『プレネー ガルド プレネー ガルド』（氣をお付け、氣をお付け）とマリヤ・
デミトリエヴナは云續けた。

『レーノチカさん叩いて御覽なさい』と、青年は云た。『私が抑へてるから大丈夫』

少女は再び手を伸して怖る〳〵びくついて居る馬の鼻柱を平手で叩いた。馬は
絶えず銜を振つたり嚙んだりした。

『あらまあ』とマリヤ・デミトリ エヴナは叫んで、『でも最う降りて此方へお入ん

なさいましな』

馬上の人は手早く馬の向を變へて柏車を加へ、往來へ乘出てやがて庭へ入つたと見ると、最う鞭を振翳しながら、廣間から通ずる戸口を扳けて客間へ駈込んで來た。それと同時に最一つの戸口からは、背の高いすらりとした、髪の毛の黑い女の子が入つて來た。歳は十九、名をリーザと云つてマリヤ・デミトリエヴナの長女である。

四

前章讀者に紹介した青年は名をウラヂーミル・ニコラーイチ・パンシンと云つて、ペテルスブルグで內務省の或特種の役を勤めて居る。O—市へ來たのは、何か臨時に行政上の仟務を帶びて、幾らか遠緣に當る知事ゾンネンベルグ將軍の隨行となつて來たのである。パンシンの父は騎兵隊の休職將校だが、評判の

欠

MISSING

ハロヴナの二人と握手をし、ゲデオノーヴスキーの肩を輕く叩いて、扨てぐるりと踵を廻してレーノチカの頭に手を載せ、其額に接吻した。

『貴方あんな手に合はぬ馬にお乘んなすつて怖くは御座いませんの』とマリヤ・デミトリエヴナは先づ彼に問うた。

『何あに貴方、彼奴は非常に優しいですよ。私は彼奴は少しも怖いとは思ひませんが、眞實私の怖い事が外にあるんです。私はセルゲー・ペトローウイチさんと勝負するのが一番怖い。昨日もピエレニチン夫人の所で悉皆むしられつちまつたんですよ』

ゲデオノーヴスキーは一寸薄つぺらな同情的な笑を洩らした。彼はペテルスブルグから來た、知事の氣に入りの此青年顯官に、何うかして取入らうと氣を揉んで居る。マリヤ・デミトリエヴナとの話の中にも、それとなく彼はバンシンの秀でた才能に云及んだ。彼は「何う云ふ點で此男は賞められるに足るのか」と

云ふやうなことを論ずるのを常とした、成程此青年は今や最高の社會へ道を開いて居る。のみならず實に有爲な敏腕家だ。それで居ながら自分のことを鼻に懸けるやうな風は決して見せない。是れは敢へてゲデオノーヴスキーが云ふばかりでは無く、實際ペデルスブルグですらも、バンシンは有爲な役人の一人に數へられて居るのである。彼は如何なる繁務をも切つて廻す。自己の仕事を特別に大切に思はぬ所謂世間の人と同じやうに、バンシン自身では事務の事などは輕く云ひ退けては居るが、併し實際に於ては彼は矢張り命令のあるがまに〳〵、聊かの猶豫もなく實行して進む働手であつた。長官は常に斯くの如き屬僚を好むものだでバンシン自身も、望めばやがては大臣の椅子にまでも漕付き得る事を疑はなかつた。

『好い事を被仰いますなあ。私が貴方をむしりましたは少々恐れ入ります』とゲデオノーヴスキーは受けて、『ですが、先週私から十二ルーブルをむしり取つた人

は誰でしたらう』

『そんな惡い事を云ふもんぢやありませんよ』とバンシンは愉快さうな、併し何所か人を馬鹿にしたやうな無造作を粧つて相手の言葉を遮り、それ以上相手には何の注意も拂はないでリーザの方へと進んだ。

『例のオペロンの序曲は未だ手に入らないんですよ』と彼は口を切る。『ビエレニチン夫人が名曲なら大抵あると云ふやうな事を云つてたんですが、ありや好加減な法螺でしてね。實はポルカかワルツの外は何も持つてないんです。ですが最うモスクワの方へ手紙を遣つときましたから、一週間以内には例の序曲は正しく上げられますよ。時に』と言葉を繼いで、『私昨日新しい歌を作りました。言葉の方も私がやつたんです。聽いて頂きませうか。何れだけ成功してるか私には分らないんです。ビエレニチン夫人には非常に氣に入つたんですが、併しあの人の云ふ事は何の意味もありませんからね。私は貴方のお考へが伺ひたい。だが何れ其の

中の事にした方が好いかも知れません』

『何故其の中なんて被仰いますの？』とマリヤ・デミトリエヴナが差出口をした。

『何故今日ではいけませんの』

『御尤も』とパンシンは答へた。一種特別の晴やかな樂しさうな頬笑がちらと顔を往來した。彼は膝で椅子を引寄せて、ピアノに向つて座つた。そして調子を當つて見てから、言葉を明瞭々々と響かせて次の歌を唄ひ出した。

地の上高く、蒼白き雲の間に
　月ぞ浮ぶ。
遠きみ空ゆ、妙なる光は
　海を照す。

我が胸の海、荒狂ふ波の面に
　月ぞ浮ぶ。
歡びもはた、悲しみもなべて
　君が儘ぞ。

我が魂は、たゞ愛の苦しき痛み
　あだなる望。
されど君はも、冷たき月影
　惱み知らず。

第二聯は殊に力と情を籠めたパンシンの聲で唄はれた。波の響は荒狂ふ和音の中に聞かれた。「あだなる望」と云ふ言葉を唄つた後で、彼は密と吐息を洩らし

眼を下に向け、聲を徐々に薄れさせた。唄ひ終ると、リーザは作意を賞めた。マリヤ・デミトリエヴナは『好いこと？』と叫んだ。併しゲデオノーヴスキーは『詩と云ひ曲と云ひ堪らなく好いですな』とまで叫んだ。レノーチカは唄ひ手の方に小供らしい尊敬の眼を据ゑて居た。竟り座に居並ぶ總ての人が一樣に此若い好事家の作に興を寄せたのである。が併し、廣間から客間へ通ずる戸口に、折柄來懸つた一人の老人が立つて居て、其老人の俯いた顏の表情と肩の搖工合を見ると、バンシンの作の如何に拘らず、其人を少しも樂しませなかつたと云ふ風が歴々と見える。暫く立止り、粗末な手巾で靴の塵を拂つて、彼は偶と眼を上げ、氣難しさうに口を搾めて、前屈みになつて客間へ入つて來た。

『やあ、クリストファー・フエードリッチ、御機嫌好う』と誰よりも先にバンシンが聲を懸けた。そして偶と椅子から立つた。

『貴方が居られやうとは思ひも懸けなかつた――一體貴方の前で自分の歌なんか

唄ふ意ぢやなかつたんです。さぞ貴方は、輕い曲はお嫌ひでせう』

『私聞きません』と新來の客は下手なロシヤ語で云放つた。そして皆と挨拶を交しながら、部屋の眞中に不格好に突立つた。

『レムさんは』とマリヤ・デミトリエヴナは口を切る。『あの、リーザに敎へに來て下すつたんですか』

『いえ、リサウエータさんぢやありません、エレーナさんにと思つて』斯う云つてレムは少女と一緒に行かうとしたが、バンシンはそれを止めた。

『課業はまあ好いぢやありませんか』斯う彼は云つた。『リサウエータさんと私と是れからベートーフエンのソナータの二部合唱を遣らうと云ふんです』

老人は何か知らぶつ〳〵答へた。バンシンは發音の違つたドイツ語で談し續ける。

『リサウエータさんから、貴方が贈られた讃美歌風のカンタータを見せて貰ひま

したが――ありや實に好いですな。私に硬い方の音樂は分らないと思つてお居でか知りませんが――何うして、稀には所倒臭くもならんでもないですが、併し矢張り非常に心を打たれる方ですよ』

老人は耳まで眞紅にした。そして横目でリーザを睨み、慌てゝ部屋を出て行つた。

マリヤ・デミトリエヴナはパンシンに今一度唄つて聽かすやうに所望したが彼はかの專門的なドイツ人の耳を苦しめる事を好まなかつた。そして二人でベートフエンのソナータを遣らうぢやないかと氣を引いて見た。と、マリヤ・デミトリエヴナは太息を吐いて、今度はゲデオーノヴスキーに庭へ散歩しやうと云つた。

『妾ね』と口を切つて、『最少しお話したい事があります。あのフエードヤの事に附いて御相談致したいと思ひますの』

ゲデオノーヴスキーは造笑をしながら頭を下げ、二本の指で帽子を摘み上げ、其の縁の所へしつかりと手袋を持添へてマリヤ・デミトリエヴナと一緒に出て行つた。パンシンとリーザは二人限り部屋に殘つた。リーザはソナータを持つて來てそれを開いた。二人は無言のまゝ並んでピアノに向つた。頭の上ではレーノチカの、不正確な指で彈でる音階の微かな響が聞えた。

五

クリストフア・テオドル・ゴットリープ・レムは一七八六年ザクゼンのヘムニッツの町で生れた。兩親は貧しい音樂師であつた。父はフレンチ角笛を吹き、母は堅琴を奏してかつ〳〵口を糊して居た。彼自身も五つの歳には最う三種まで異つた種類の樂器を習つて居た。八つの歳に彼は頼り無き孤兒となり、十の歳から藝を賣つて麵麭に代へる身の上となつた。彼は北移年の間放浪の生活を送り、料

理屋、市場、百姓の婚禮、さては舞踏會と、所嫌はず演奏し廻つた末、遂に或音樂隊の群に入り、次第に出身して指揮者の地位を得るまでになつた。彼は演奏に懸けては不得手であつたが、頭腦では音樂其ものを底の底まで解して居た。二十八歳の時、彼はさる大貴族の招に應じてロシャへ移住することゝなつた。其貴族と云ふのは、素より自分には音樂などは少しも解らなかつたが、たゞ裝飾として音樂隊を養つて置いた。レムは音樂隊の指揮者として其家に居る事七年、最後は全裸と云ふ哀れむべき有樣で其處を去つた。其貴族は破産したので、始めレムに約束手形を與へる意であつたのだが、後にはそれすら與へる事を拒んだ。竟り一文も拂はず仕舞に終つたのだ。レムは其當時人からロシャを去れと勸められたが彼は貧乏のまゝで、此國——此藝術家に取つての一大金坑たる大ロシャを見捨てゝ故國に歸るには忍びなかつた。彼は其まゝ留つて飽くまで運試しをやらうと決心した。斯くて二十年の間、此哀れなドイツの音樂師は頻りに運試しをやつた。

彼は此處彼處と貴紳の家を渡り歩いた。彼は慘々苦しい目に遇つた。幾度か忍び難きを忍んだ。困窮と戰つた。氷上の魚の如くに跪いた。併し一度は故國へ歸らうと云ふ一念は、如何なる困厄の中にあつても念頭を去らなかつた。彼は此の夢想の爲めにあらゆる困苦にも耐えた。けれども運命は遂に、彼に此の最初にして最後なる幸福を授くる事を諾かなかつた。五十歳になつて健康全く衰へ歳よりもずつと早く歳を取つた彼は、蹌踉として此處〇一市へと流れて來た。そして彼が爾く忌厭つたロシャをも、今は最う去る望全く盡きて、此町を彼はせめてもの永住の地と定めた。彼は今は人の師匠をして微かながらの生計を立てゝ居る。レムの風采は至つて揚らぬ。脊は低く、おまけに猫脊で、肩は歪み、胸は搾つて居る大きな扁平い足をして、手は筋張つて赤く、指は節立つて骨ばり、爪は紫がゝつた白い色をして居る。皺の寄つた顏、落込んだ頰、引搾めた唇、其唇を彼は何時も歪めたり嚙んだりして居る。それで居てむつり〳〵して居るので、何となく

薄氣味惡い厭な感じを起させる。白髪交りの髪の毛は房のやうに低い額に垂り、ぶす〳〵燻る燃さしの火のやうに、彼の小さな据つた瞳は光る。動くのも大儀さうで、一足毎に不格好な身體を前の方へゆすぶる。籠の中に飼はれた梟は、黄色い大きな眼を怯る〳〵懶さうに光らせても碌に何も見えないのだが、それでも人が見て居ると感付くと堪らない無様な格好をする——レムの擧動は其無様な格好を聯想させる。假借無き永い間の悲痛は、此哀れむべき音樂師の上に消し難き痕を留め、元來が餘り人好のせぬ彼の人柄を猶々不格好にし不具にした。併し何人も第一印象を通越して了ふと、此半ば壞癈した人の上にも、何處となく善良な、正直な、聡通とは異つた何物かを發見するに違ひない。

バッハとヘンデルの崇拜者たる彼、活氣に充ちた想像力に、加ふるにドイツ民族に特有な大膽奔放な構想の力を享けた天晴れ一藝の主たる彼、若し彼レムにして生涯の經歴さへ異にして居たら、或は何時かは知らず祖國の大作曲家と肩を比

べて居るやうな事があり得たかも知れぬ。けれど彼は不運な星の下に生れて來たのだ。彼は生れて多くの作をなした。而も一つとして公にするを得なかつた。彼は事をなすに道を知らず、人氣を得るに所を知らず、又進出づるに時を知らなかつた。何でもずつと以前の事だが、彼の友人で崇拜者で、又彼と同じくドイツ人で彼と同じく貧乏な一人の男が、彼の作のソナータ二種を自費で公刊して呉れたが、全部の版本は音樂書肆の架上に空しく塵埃に埋れて居た。そして其書物は夜中河に物を投げるやうに、何の迹をも止めずに消去つた。レムは遂に一切を斷念した。一つは老る年の故でもあらうが、指の硬張つたやうに彼の心も何時か硬張つて了つたのだ。彼は今カリーチン家からは餘り遠くない所の小屋に、貧民院から引上げて來た料理番に食事をさせて、獨り寂しく暮して居る。(彼は遂に結婚はしなかつたのだ。)彼は毎日、長時間の散歩をし、聖書と新敎譯の詩篇と、シエレーゲルの譯でシエクスピーアを讀む。彼は久しく作曲に遠かつて居たが、近頃第

一の弟子たるリーザに吹込まれた感興に依つてカンタータを作つた。バンシンが先刻云つたのは其の事である。此カンタータの歌詞は、讃美歌集から拾ひ集めたのに、二三自作の章句をも加へたものだ。二つの合唱から出來て居る。一は幸福一は不幸な、二つの合唱が末に至つて和合し、『惠深き神よ、吾等罪の子を憐み給へ、吾等をしてなべての邪なる思より、なべての地なる望より救はせ給へ』と唄ふ。見返しの所には頗る丁寧に飾りまで付けて、『宗教歌曲「信仰ある者のみ赦される』愛弟子エリサウエータ・カリーチン嬢の爲めに、其師チエー・デー・ゲー・レムゼを作りて贈る』と書いてある。『信仰ある者のみ救はる』と云ふ語と、エリザウエータ・カリーチン』と云ふ名だけ、旭光の飾枠を畫き廻らしてあつて、其下に「ヒユール ジー アライン』（たゞ御身の爲めに）とドイツ語で書いてある。先刻レムが顔を赤くして怨めしげにリーザを睨んだのも、是れあるが爲めで、面と向つてバンシンに此歌曲の事を話された時に、彼の胸は深くも傷けられたので

あつた。

六

低音部を務めたバンシンは、先づソナータの最初の和諧音を強く思ひ切つた調子で彈じたが、リーザの方は始めなかつた。でバンシンは、手を止めて對手の方を見た。リーザの眼はじッと此方を見詰めて、不快さうな表情をして居る。唇邊には微笑の影もなく、顔全體に氣難じさうな、何方かと云へば悲しげな色すら見える。

『何うしたんです』と彼は訊ねた。

『貴方は妾をお欺しなすつたのね』とリーザは云つた。『貴方がレムさんには何にも云はないと被仰つたから、あのカンタータをお見せ申したんぢやありませんか』

『いや、誠に濟みませんでした。遂うつかり口を辷らして了つたんです』
『貴方はあの方の感情を害してお了ひなすつた。私だつて心持好くはありませんですわ。あの方は最う私まで信用なさらないでせう』
『何うも困りましたなあ。一體私は小供の時分から、ドイツ人と見ると兎角詐ひたくなるんでしてね』
『まあ、何を被仰るの？ドイツ人はドイツ人ですけれど、あの方は哀れな、寂しい失敗の人なんです――貴方は氣の毒にはお思ひなさいませんの？何うして詐ふ氣になんかお成りなさるのでせう』
バンシンは聊か面喰つた。
『御道理です、リサウエータさん』と彼はきつぱり云つて、『相變らず私の無考へなのには、眞實恥入ります。何うぞ責めて下さいますな、自分にもよく分つて居るんですから。いや實に、自分の此の無考へと云ふ事の爲めに、私も非常な害を

蒙つて居るんです。私が利己主義者のやうに世間から思はれて居るのは、眞實此の無考への爲めです』
バンシンは暫く口を噤んだ。一體彼は如何なる事柄に付いて話をしやうとも、最後は必然自分の事へ持つて行く。そして、殆ど自分でも無意識であるやうに、すら〳〵と滑らかに、且樂しさうに其話を運んで行くのだ。
『例へば、此方のお宅にしました所で』と彼は言葉を繼いで、『貴女のお母樣は私を善く思つて居て下さる。貴女は――さあ、貴女は私を何う思つてお居でゞすか私には分りませんが、併し貴女の叔母樣は無暗と私をお嫌ひのやうです。必然何か、無考へな馬鹿々々しい事を申したのがお氣に障つて居るに違ひありません。私があの方のお氣に入つて居ないのは貴女も御存じでせう？』
『えゝ』リーザは氣乘りがせぬやうに答へて、『叔母さんは餘り貴方をお好きぢやありませんのよ』

バンシンは慌てゝピアノの鍵板の上に指を走らせた。有るか無きかの微笑が唇邊に仄めいた。

『成程、では貴女は？』と彼は云つた。『貴方も矢張私を自分勝手の人間とお思ひですか』

『妾には未だ能く分りません』とリーザは答へて、『ですけれど貴方を、自分勝手の方とは思ひませんわ。それ所ですか、妾却て貴方の御親切は感じて居りますの』

『如何にも、如何にも』とバンシンは遮つて、再び鍵板の上に指を走らせた。『私は貴女の所へ、曲や書物を持つて來ます、拙い畫を畫帖に挾んで上げます、まあそんな風な事から貴女は然う被仰るんでせう。それだからつて、利己主義者は矢張利己主義者でせうからなあ。自分では是れで、貴女からは厄介な奴だとか、惡い奴だとか思はれては居ないと思つて居るんですが、併しそれでも、貴女は私を——さあ何と云つたら好いでせう——竟り私と云ふ男は、笑談の爲めには、友人

でも父でも犧牲にするくらゐの事は行る男だと思つて被居るでせう』

『貴方は一體世間馴れた人のやうに、氣輕で、忘れつぽくて被居る』とリーザは云つて、『其限りの事ですわ』

バンシンは稍眉を顰めた。

『さあ』と彼は云つて、『さあ最う議論は止にして、ソナータを彈かうぢやありませんか。それにしても、只一つお願ひがあるんですがね』と樂譜臺の上の本の頁を手で撫でゝ、『そりや私の事を御隨意に、利己主義者とでも何とでも被仰い、ではありますが、只併し、世間馴れた人とだけは、被仰つて戴きたくはないですな然う云はれるのは何よりも辛いのです……アンク　イオ　ソノ　ピットレ（私だつて一個の美術家です）ね、私だつて、やくざにしろ一個の藝術家です。竟り、私は是れでもやくざな藝術家だと云ふ事を、今直にお目に懸けませうと云ふのです。さあ始めやうぢやありませんか』

『えゝ、致しませうとも』とリーザは云つた。

バンシンは二三度間違つた調子を出したが、兎に角初めの緩調は可成に好く行つた。彼の自作の曲や、充分練習したものは非常に好く行るが、曲を見ながら行るのは好くない。で、ソナータの第二部は――稍速い急調――は全で調子をなさずに了つた。第十二節目へ來て、二節遲れて居たバンシンは遂々へこたれた。そして椅子を背後へ押退けて笑ひ出した。

『今日は駄目だ。到底も行れません。レムさんに聞かれないで好い事をした。あの人が聞いて居たら、眼でも廻したでせう』

リーザは起上つてピアノの蓋をして、バンシンの方へ向直つた。

『此度は何をしませうか』とリーザは訊ねた。

『其お問は丁度貴女のやうだ。貴女は一刻もぢッとして居る事がお出來なさらんのですね。では、まあお望なら寫生でもしませうか、未ださう暗くもなりません

から。多分其の方の神様、繪の神様の事です――えゝと、名は何とか云ひましたね、私忘れて了つた――まあ兎に角繪の神様なら、音樂の方より少しは私には御慈悲深いと思ふんです。畫帖は何處へ行きました。多分未だ、私の風景が畫上げて無かつたやうに覺えて居ますが』

リーザは畫帖を取りに他の部屋へ行つた。バンシンは獨りになると、ポッケットから麻の手巾を取出して爪を拭き、批評的な樣子で自分の手を眺めた。彼の手は如何にも美しくて白く、左の手の無名指には螺旋狀をした黃金の指環を嵌めて居る。やがてリーザは戻つて來た。バンシンは窓際に腰掛けて畫帖を開いた。

『やあ』と彼は叫んで、『貴女は私の風景を寫し懸けたんですね――而も非常に好い。是りや素敵だ。只一寸此處の所が――鉛筆を頂戴――此處の影が充分強く行つて居ません。ね、御覽なさい』

斯う云つてバンシンは力を入れて、長い筋を二三本畫足した。彼は何時も同じ

景色ばかり畫いた。前景に大きなもぢや〳〵した木立があり、背景にはずつと草塲が開けて、遙かな地平線にはぎざ〳〵した山がある。

リーザはバンシンの肩越しにその筆遣を眺めた。

『繪を畫くには、矢張一般に吾々の生活に於けると同じく』バンシンは左右に頭を動かしながら斯う説明した。『輕快と大膽と――此の二つが大切です』

こんな事を云つて居る所へレムが入つて來て、固苦しい挨拶をして暇を告げやうとした。がバンシンは、慌てゝ畫帖と鉛筆を投り出して引留めた。

『フエードリッチさん、何處へお行でゞす。今暫く居らして、一緒にお茶の御馳走にでもならうぢやありませんか』

『私、家へ歸ります』とレムは不機嫌さうな聲で答へて、『頭痛がするのです』

『何あに好いでせう。お居でなさいシエークスピア論でも行らうぢやありませんか』

『頭痛がするのです』老人は同じ事を云つた。

『私達は貴方の居られない間に二人でベートーフエンのソナータを行つて見たんです』とバンシンは懷しさうに彼を捉へながら、晴やかな笑顔で言葉を繼いだ。

『ですが、何うも好く調子が合はなかつたんです。何うです、私と來ちや二節と云ふもの、悉皆行れない所があつたんですからね』

『貴方は御自作のお歌を繰返しお唄ひなさつた方が增だつたでせうがなあ』レムはバンシンの手を除けながら斯う答へて出て行つた。

リーザは其迹を追うて、階段の所で追着いた。

『フエードリッチさん、一寸聞いて下さい』とリーザはドイツ語で云つて、庭の丈の低い青草の上を、門の所まで一緒に付いて歩きながら、『妾惡う御座いました――何うぞ御免遊ばせ』

レムは何とも答へなかつた。

『妾ニコラーウイチさんに貴方のカンタータをお目に懸けたのです。それは無論あの方に分るだらうと思つたからなんですの――眞實あの方にも大變お氣に入つのですわ』

レムは立止つた。

『そんな事は何でもありません』と彼はロシャ語で云つて、更に自國の言葉で附足した。『だがあの人に何が分るもんですか、貴女は又それが分らないとは不思議ですね。あの男は好事家だ――それだけの事です』

『そりや間違ひですわ』とリーザは答へて、『あの方は何でもお分りになります。そして御自分でも、大概の事はお出來になるんです』

『成程、何事でも第二流に、安つぼく好加減には出來るでせう。それが面白いのです。自分でも面白い。それで自分でも滿足して居る――愈々結構な譯だ。だが、私は怒つては居ませんよ。あの歌曲と私――好い老恐の一對です。私も少しは恥

かしかつた、併し何でもありませんよ』

『何うぞ、勘忍して頂戴、フエードリッチさん』とリーザは又しても云つた。

『何でもありません』と再び彼はロシャ語で云つて、『貴女は好いお娘です……おや、誰か面會に來たやうです。左樣なら。貴方は眞實好いお娘です』

斯う云つてレムは門の方へ急ぎ足に行つたと、擦違ひに鼠色の上衣を着、鍔廣の麥藁帽子を冠つた見知らぬ一人の紳士が門を入つて來た。レムは其人に向つて丁寧に挨拶をした。一體彼は○―市で新しい顏に出遇すと必ず挨拶をする。それで居て知顏だと、往來で遇ふ度に毎も顏を反ける。是れはレムが自ら採る所の一種の法則なのだ。レムは新來の人と擦違つて、生垣の影へ姿を消した。客は慇いてレムの背後を見送つた。そして此度はリーザの方をしげ〳〵眺めてから、ずつと其の方へ近寄つた。

七

『貴女は私が分らないでせう』と彼は帽子を取りながら云つた。『あれから最う七年にもなるが、私には貴女が能く分る。あの頃は貴女は未だ眞の赤兒ちやんだつた。私はラヴレッキーですよ。お母様はお在宅ですか。お目に懸れるでせうね』

『母様はお目に懸つたら嘸喜ぶでせうよ』とリーザは答へて、『貴方の此國へお來での事は、母様も存じてなんでございます』

『貴女はエリザウエータさんと被仰るんでしたね。然うでせう』斯う云つてラヴレッキーは階段を上つた。

『えゝ』

『いや、能く覺えてますよ。貴女はあの時分でも、忘れられないお顏のお娘でした、私よく甘い物を持つて來て上げたもんでしたよ』

リーザは顏を赤くした。そして妙な人だと思つた。ラヴレッキーは暫く廣間で待つた。リーザは、客間へ行つた。其所からはバンシンの話聲と笑聲とが聞かれた。彼は今し方庭から入つて來たマリヤ・デミトリエヴナと、ゲデオノーヴスキーの二人を相手にして、何か町の事を談して居るのだ。自分で談す事に我から興がつて大きな聲で笑つて居る。其の最中へラヴレッキーと云ふ名を云はれたので、マリヤ・デミトリエヴナは大狼狽に狼狽き、顏を眞蒼にして客を迎へるべく部屋を出た。

『本當にまあ、お壯健で』と哀れつぽい泣出しさうな聲で彼女は叫んだ。『能くまあ、お來で下すつたのねえ』

『御機嫌好う』とラヴレッキーは答へて、差出された手を固く握締めた。『皆様お變りもありませんで』

『さあお掛けなさいましな。まあ、何て嬉しいでせう。では先づリーザをお目に懸らせませう』

『いや最う、リサウエータさんには遇ひましたよ』とラヴレッキーは遮つた

『此の方がパンシンさん……此方がセルゲー・ペトローヴイチ・ゲデオノーヴスキーさん……まあ何うぞお掛け遊ばせ。妾先刻貴方をお見受け申した時は、眼が何うかしたんぢやないかと思ひましたくらゐですの。別にお變りも御座いませんでしたか』

『御覽の通り、益々盛んです。貴女も――別にお障りもなくて――あれから八年も經ちますが、一寸もお變れなさつた樣子は見えませんねえ』

『本當にお久し振でしたのねえ』と夢見る如くマリヤ・デミトリエヴナは云つて、『今は何所から被來つたの？何所に置いて被來たんです……あの、それ』と慌て註を入れて、『あの……少しは此家に縱りし被居る事がお出來なさるんでせう』

『今ペルリンから來た所なんですよ』とラヴレッキーは答へて、『で明日郷里へ歸らうかと思ふんです――多分ずつと其方に居る事になるでせう』

『ラヴリーキーの方ぢやありませんの？』

『いえ、ラヴリーキーぢやありません。此所から二十哩程の所に一寸した持地があるんです。其方へ行かうと思ひます』

『それはグラフイーラさんの方から、貴方へお讓りなさつたあの一寸した地所の事でせう』

『えゝ』

『ですけれどねえ。眞實あのラヴリーキーの方には、あんな立派なお住居がお有りぢやありませんか』

ラヴレッキーは稍眉を顰めて、

『えゝ……ですけれどあの小さな持地の方には、一寸した住居もありますし、そ

れに當分はあれ以上必要もありませんからな。何しろ今の私には、あの方は何かに便利なんです』

マリヤ・デミトリエヴナは又しても胸が迫つて、さも〳〵堪えられぬと云ふ風に身體を硬くして、兩手をだらりと下げて居る。バンシンは其手助けにとラヴレッスキーの話相手となつた。マリヤ・デミトリエヴナはやがて落着き、肱掛椅子に倚り懸つて。時々言葉を挾んだ。併し此新來の客に對しては、心の休まる隙も無く同情して、思ひ深げな溜息を洩らしたり、くさ〳〵するやうに首を振つたりした。で終には、客の方から我慢が出來なくなつて、何方かと云へば鋭い調子で、『貴方は氣分でもお悪いんぢやありませんか』と訊ねたくらゐであつた。

『有難う、いえ別に』とマリヤ・デミトリエヴナは答へて、『何故そんな事をお聞きなさいますの』

『何うも御樣子が變つて居ますから』

マリヤ・デミトリエヴナは威儀を正した。幾らか機嫌を損ねたらしい樣子さへ見えた。『其方が然うならば此方だつて何も氣にする事はない。まるで家鴨が水を潜つたやうに、此人には何もかもつる〳〵辷落ちて少しも痕が殘らないんだ。大概の人なら苦勞をすれば窶れるのが當然だのに、此人は肥つたんだから可怪しい。』腹の中ではこんな事を思つて居るのだ。だが腹の中では種々に思つても、口には少しも出さず、益々陽氣に談した。

確かにラヴレッキーの樣子には、少しも運命の犧牲と云ふやうな風が見えなかつた。頰の薔薇色をした純然たるロシヤ式な彼の顏、廣く白い彼の額、割合に大きな彼の鼻、それから長く一文字になつた唇それ等は如何にも高原の剛健な氣と、勇猛な原始的な力とを帶びて居る。彼は素晴しい體格に出來て居て、美しい卷髮は小供らしく亂れ立つて居る。唯彼の碧い眼、生下つた眉毛、何方かと云へば凝と物を見詰めるやうな眼付、唯それだけに陰鬱とも倦怠とも定かに見分

けがたい一種の表情があるばかりだ。彼の聲には又幾らか單調らしい所があつたパンシンは絶えず話を續けて居たが、偶と話題を一轉して、先頃彼が讀んだ二種のフランスの小冊子に書いてあつたとか云ふ、砂糖製造の効能を述立てた。彼は如何にも鹿爪らしく其内容を説明した。但し其説の出所に付いては一言も云はなかつた。

『おやまあ、フエードヤ！』折柄隣の部屋から半ば開いてある戸口を洩れて、マルフア・チモフエーヴナの斯う云ふ聲が響いた。『眞實フエードヤだよ』斯う云ひさま老婦人は慌しく部屋へ驅込んで來た。そしてラヴレッキーが席を起つ隙も無く、老婦人の兩手はしつかりと彼の身體を卷いた。

『まあ能うく顏を見せて貰ひませう』と眼に近く對手の顏を据ゑて、眺め入りながら老婦人は云つた。『あゝ、本當に丈夫さうだ。少しは老けたやうだけれど、全く些しも變つては居ない。だが何故妾の手なんか接吻するの――顏にして頂戴よ

皺くちやなのが怖くなかつたら。お前さんは些しも此叔母さんの事を心配して下れでなかつたのねえ。生きてるか死んでるかくらゐは訊ねて下れても好さゝうなものぢやないかね。お前さんが生れると直抱かれたのは此叔母さんの手だよ。本當に爲やうの無い子つてありやしない。そんな事はお前さんには何でもないのだらう。それでもまあ好く、忘れないで來て下れたのねえ。あゝ、それから』突然マリヤ・デミトリエヴナの方へ向直つてから斯う呼んで、『何か此人に食べさす物でも無いの？』

『何にも欲しくはありませんよ』とラヴレッキーは慌てゝ止めた。

『さあ、兎に角一緒にお茶でも飲みませう。あゝあゝ、何所からとも分らずこんな人が遣つて來て、加之に誰もお茶一杯下れる者は無いつてのだもの。リーザ、お前さん驅けて行つて、大急ぎに拵らはしてお來でなさい。此人は小供の時分は怖ろしい食心坊だつた。今でも大方飲食ひする事は好きなのだらうねえ』

『相變らずお邪魔になつて居ります』斯う云つてパンシンは夢中になつて居る老婦人の方へ近寄つて、丁寧に頭を下げた。

『おや〳〵御免遊ばせ』とマルファ・チモフ エーヴナは答へて、『妾餘り嬉しかたので、大變失禮しました……お前さんは歳を取つてだん〳〵お母さんに似て來た』と云ひながら又もやラヴレッキーの方へ向いた。『それでも鼻だけは何うしてもお父さんだ。それだけは變らない。それは然うと、お前さんは少しは緩りして行かれるんでせう』

『叔母さん、明日行かうと思ふんです』

『何所へ？』

『ワシリエヴスコーの家へ』

『明日ですつて？』

『え〳〵、明日』

『何うしても明日と云ふなら、それも好からう。矢張それがお前さんには一番好いんです。でも行く時には、妾の所へ來て然う云つて頂戴よ』斯う云つて老婦人は相手の頰を輕く叩いた。『實はね、妾は最う此世ではお前さんには遇へない事と思つて居た。と云つても、未だ〳〵死ぬやうな氣なんかしないんです——何うして〳〵、未だ十年は大丈夫の意で居るのさ。一體ペストフ家の者は、皆長命の質で、お前さんの祖母さんなんぞは、私達に皆二人前の壽命を持つて居るんだつて、口癖のやうに被仰つてお居でたくらゐだ。それは然うとね、お前さんが此の先何時まで外國に徘徊いて居る事やら少しも分らなかつたんです。本當に能く歸つてお下れだつた。お前さんは以前よく行つたやうに、今でも二十ストーンぐらゐは片手で差上げる事がお出來だらうね。お前さんのお父さんは隨分と突飛な事をした人だが、それでもあのスウイッル人の教師をお前さんの爲めに雇入れたのは大出來だつた。お前さんもあの人とよく拳固で叩きつこをしたのは未だ覺えてる

だらうね。ほら、皆が其事を體操とか云つたつけね。それは然うと、妾はまあ飛んでも無いお喋りをして了つた。恐皆バンシンさんのお話の邪魔をして了ひました。(バンシンと云ふ名を呼ぶに、毎も發音を錯つて前の方にアクセントを置かないで云ふのは此人の癖だ、)何よりまあ行つてお茶でも飲みませう。さあ皆さんテレースの方へ行つてお茶を飲まうぢやありませんか。大變好いクリームが有るんです。そりや、人樣方のロンドンのだとかバリーのだとか被仰るのとは品が違ふんです。さあ〳〵參りませう。フエードヤ、お前さんは妾に腕を貸して下れるんだよ。まあ何て頑丈な腕だらう。お前さんさへ側に居て下れゝば、妾は何んな事があつても轉ばないよ』

一同は起つて、テレースへと出た。が、ゲデオノーヴスキーだけは密り抜出して了つた、彼はラヴレッキーが此家の女主人や、バンシンや、それからマルフア・チモフイエーヴナと談して居る間中、隅の方に座つて、眼を瞬き、小供らしい好

奇心を以て口をぱくんと開けて、始終の話を傾聽して居たが、事茲に至つて、彼は此最新の出來事が町中へ觸廻るべく急ぎ去つたのだ。

其日の夜の十一時に、斯う云ふ光景が此カリーチン家で演ぜられた。階下ではウラヂーミル・ニコラーイチ・バンシンが、首尾よき機會を得て、客間の戸口でリーザに追ひ告げつゝ、手を差出してこんな事を云つて居た。

『私を此家へ引寄せるのは何人の力か、貴女も能く御存じでせう。此方のお宅へ斯うやつて、足繁く私が參るのは何の爲めだぐらゐは貴女はお分りでせう。何事も斯う分つた以上は、私には最う何も申上げる事は無いのです』

リーザは口を利かなかつた。そして、こりともせずに凝と地上を見詰めた。心持眉を顰めて、頰を仄と赤らめて居る。併し別に手を引込めやうともしなかつた

丁度其頃二階では、マルフア・チモフエーヴナの部屋で古びた聖像の前に釣下げた洋燈の傍に、ラヴレッキーが低い椅子に腰掛けて居た。兩肱を膝の上に突い

で、兩手で顔を蔽うて居る。老婦人は其前に起つて時々無言で、ラヴレッキーの髪の毛を梳じて下れて居る。彼は家の女主人に遑を告げてから、最うかれ是れ一時間以上斯うして老婦人と一緒に居るのだ。彼は此の情深い老友に何事もよく云得なかつたし老婦人も彼には何事も訊ねなかつた。……眞實、今更何事をか語り、何事をか訊ねる要があらう。そんな事をしなくても彼女は總てを了解し、對手の胸に充ちたあらゆる者を感じて居るのだ。

八

フエードル・イワーニチ・ラヴレッキーは――玆に暫く話の繋ぎを止めて述べて置きたい事がある――或る系統の古い貴族の出である。ラヴレッキーの家の先祖は、ヴシリー盲帝の代にプロシャから來たもので、當時はピエッエーツク州に二百チ　ワアルトの土地を賜はつて居た。其の子孫の多くは種々の官

欠

MISSING

優待するのだが、それで居て然う云ふ連中の居ない時には何時も悶々として居た夫人は至極柔和な女で、父の選擇と命令で、遂近くの去る一族の中から貰つたのだ。名をアンナ・バーヴロヴナと云つた。何事にも逆らはず、客人は丁寧に遇すし、自分では白粉を付けるのは死ぬ程厭だと云ひ〳〵して居る癖に、矢張氣輕に世間へも出歩いた。

『世間の人達は狐の毬のやうなものを頭に付けたり、髪の毛を梳し付けたり、油を塗つたり、粉を振懸けたり、鐵の留針を差したり、――終ひには洗ふ事も出來なくして了ふ。けれど、まさか白粉を付けないで人樣を訪ねる事も出來ない――機嫌を損ねるばかりだからね。あゝ、本當に辛氣な事つてありやしない』

夫人は年老つてからよくそんな事を云ひ〳〵した。夫人は又足の速い馬に馬車を引かせて歩く事が好きで、骨牌と來ると朝から晩までゞも行つた。夫が骨牌臺の傍へ來るやうな事があると、勝負を兩手で隱して了ふのが夫人の常であつたが

其癖夫の望とならば自分の持參金は云ふに及ばず、自分の者と名の付く者は何でも出して遣る程の氣前は持つて居た。夫との間に小供が二人あつた。一人は男で名をイヴンと云つて、かのフエードルの父、一人は女で名をグラフイーラと云つた。イヴンは家で育てられずに、叔母に當るクーベンスキー公爵夫人と云ふ財産家の老夫人の手許で養はれた。老婦人は彼を世嗣にと定めて居た。併し始めから然う分つて居たなら父は彼を手放して遣りはしなかつたのだが、老婦人は彼を人形のやうに裝はせ、あらゆる教師をあてがひ、家ではフランス人の教師に世話をさせた。其家庭教師と云ふのは、ジャン・ジャック・ルッソーの弟子で、元或る僧院の長を務めて居た。名をクールタン・ド・ボーケルとか云ひ、狡猾な策士であつた。所が老婦人は、此男を呼んで『外國種の美しい花』と云つて居た。そして最後は、七十にもなつた分際で此の『美しい花』と結婚し、財産の全部を擧げて此男の手に委ねた。が間も無く胭脂を塗られ、『A la Richelien』香を懸けられ

の小厮共や、美しい狗や、鳴立てる鸚鵡などに取卷かれて、ルイ十五世時代の屈曲した絹の褥椅の上で、手には燒藥を懸けた鼻烟盒を持つたまゝ老婦人は永遠の睡に就いた。眞實夫の爲めに荒らされて死んだのだ。して巧に取入つたクールタンは、老婦人の財産を握つてパリーへ行く事となつた。

イヴンが此の思設けぬ災難に遭つたのは十二の歳であつた。但し玆に災難と云ふのは公爵夫人の死んだ事ではなくて、かの結婚事件の事を云ふのだ。大きな財産の相續者と云ふ地位から、突如として哀れなる一個の親戚と云ふ地位へ落されたのを知つたイヴンは、最早や此の上叔母の家に居る氣にはなれなかつた。從つて彼が是れまで生立つて來たペテルスブルグの交際社會は、彼に對して門戸を閉ぢて了つた。と云つて苦役と微賤の外何物もなき下級の官吏生活に入るが如きは、彼に取つては最も嫌惡すべき事であつた。何しろ其頃は丁度かのアレキサンドル大帝の即位後間も無い時であつたのだ。

以上のやうな有様で、イヴンは厭々ながら父の許へ、生れた家へ歸らなければならなかつた。彼の兩親の家は如何に汚く、如何に貧しく、如何にみすぼらしく彼の眼に映じたであらう。田舍に於ける生活の停滯と卑賤とは、一歩毎に彼を腹立たせた。彼の心は倦怠の腐蝕する所となつた、のみならず、母を除く外の家族は、總て親しみの無い眼を以て彼を見た。父は彼の都會風の態度を好まなかつた。彼の燕尾服を好まなかつた。彼の緣飾りを付けた襯衣の胸を好まなかつた。彼の書物を好まなかつた。彼の聲を好まなかつた。それから彼の氣難しい態度——それには彼の周圍に對する嫌惡の情が當然見出されるので、父は又それを好まなかつた。斯の如くして父は、絶間なく我子に對して不平を呟き續けた。彼は毎もこんな事を云ひ〳〵した。

『何にも彼の氣に合ふものが無い。膳に向へば難しい顏をして居て何も食はず、部屋が熱くて臭いと云つて我慢が出來んやうな樣子をする、酒に醉ふた者は嫌ふ

し、彼の前ぢや人を打つ事も出來ん、官へ出るのは嫌ふ、身體は弱い、眞實手に終へぬ奴だ。何でもありや皆、ヴォルテーアなぞにかぶれたお蔭だ』

此老人はかのヴォルテーアや狂信者の名あるディデロオに對しては殊の外嫌惡の情を持つて居た。然うは云ふものゝ、其人達の著述は一言一句たりとも讀んだ事は無かつた。蓋し讀書は此人達の分際の行る事ではなかつたのだ。ピヨートル・アンドレーイッチの此の鑑定は誤らなかつた。實際息子の頭はディデロオやヴォルテーアで一杯になつて居た。いや此の二人だけで無く、ルッソーやヘルヴェシウスや其他同じやうな類の、多くの文士が息子の頭を占領して居た。但しそれは頭だけであつた。前に述べたイヴン・ペトローヴィチの家庭教師であつた退職坊主で、同時に百科學者たるかの男が、好んで弟子たるイヴンに十八世紀のあらゆる知識を注込んだのだ。イヴンはひたすらそれに溺らされた。總てが彼の頭を占領した。併しそれは血には混じなかつた。心の奥へは徹らなかつた。

從つて又、何等の確固たる信念をも成すに至らなかつた…だが眞實今日に於てすら、我々が信念を得んとして不成巧に終つた時代に、誰かかの五十年も前の青年に信念のあるべきを思ひ得やう。

斯くて又イヴン・ペトローヴイチは、父の家へ來る客までも卑めた。彼は嫌惡の情を以て彼等に對し、彼等は妙に彼を怖れた。更に二十も歳上な姉のグラフイーラに對しては、彼は聊かも調和する事が出來なかつた。此グラフイーラと云ふ女は、又一寸變者で、顏は醜く、猫脊で痩せつぽちで、酷しいぎよろんとした眼の、薄い引搾めた口の女であつた。其の顏と云ひ、聲と云ひ、それから一刻な角々しい擧動と云ひ、總て祖母に當るジプシー種のアンドレイ夫人悉皆であつた。强情な上に權勢が好きと來て居るので、てんで緣談などは對手にしなかつたイヴン・ペトローヴイチの歸つて來たのは、姉の計畫とは全然相容れなかつた。クーペンスキー公爵夫人が弟を養つて居て下れる以上、姉は少くとも父の財

產の半ばゝ自分の手に入る事と思つて居た。貧婪の點でも祖母其儘なのだ。それ等は別としてもグラフイーラは、弟を酷く嫉んだ。弟は善い敎育を受けて居る、自分が「ボン　ジュール」(今日は)とか「コムマ　ヴー　ポルテーヴー」(お變りも御座いませんで)とか云ふくらゐすら碌に發音する事が出來ないのに、弟はパリー辯でフランスの好い言葉を談して退ける。無論兩親はフランス語などは些しも知らないのだが、そんな事は彼女に取つては何の慰めにもならない。

イヴン・ペトローヴイチは田舍生活の慘さと懶さとに對して、何うして好いのか分らなかつた。漸と一年しか田舍住居が出來なかつたのだが、而も其の一年が彼には十年にも思はれた。彼が見出し得た唯一の慰藉は母と話をする事であつた。毎でも天井の低い母の居間に座つて、彼は人の好い母の生一本な話を聽いたり、砂糖漬を食つたりした。丁度其頃アンナ・パーヴロヴナの召使の中に、澄んだ優しい眼の、樣子の垢拔した美しい娘が一人居た。名をマラーニヤと云つて優

しい悧巧な娘であつた。其娘が始めて遇つた時から既にイヴン・ペトローヴイチの心を引付けた。彼は遂に其の娘に惚込んで了つた。其のおづ〳〵した振舞、恥を含んだ物言ひ、優しい聲、優しい笑顔、それ等の總てが彼の心を摘にした。そして日一日と見る度、美しく可愛くなつた。女の方でもロシヤの娘でなければ出來ぬ行方で、全心を擧げてイヴン・ペトローヴイチの者となつた。田舍の大家の事だから秘密は到底も永くは保たれず、若主人とマラーニヤとの此の戀は忽ちの間に總ての人の知る所となつた。噂は遂に父たるピョートル・アンドレーイチの耳にまでも達した。是れが他の場合でゞもあつたら、父だとてこんな小さな事にまで、かれこれ云ひはしなかつたらうけれど、息子に對しては既に不快の感を抱いて居た矢先なので、父の方では寧ろ此事の起つたのを、都育ちの洒落者たる息子の頭を抑へるに好い機會だと喜んだ。騷ぎは益々大きくなつた。マラーンヤは納戸へ押込められる。イヴン・ペトローヴイチは父の前へ呼付けられ黑人

る。アンナ・パーヴロヴナはぎやん〳〵騷立てる。それは〳〵大きな騷ぎとなつた。終に母から父を宥めやうと氣を揉んだが、父はてんで聞かうともしない。彼は恰で鷹のやうな勢で息子に食つて懸つて、其の不德を責め、不信神を責め、僞善を責めた。彼は腹の中に煮繰返つて居るクーベンスキー夫人に對する憤怒を、今こそ思ふさま晴らす時だと、無暗と讒侮の言葉を息子に浴せ懸けた。

イヴン・ペトローヴイチも初の間は默つて、耐えて居たが、父の方で何か恥づべき所罰を以て脅すのが適當だと云ふ考を抱くに及んで、彼は最早我慢が爲きれな〳〵なつた。彼は思つた。「もし二度と例の狂信的のデイデロオを持出しなんかして見ろ、其の時こそ斷然たる所置を取つて贈玉を潰してやるぞ」で、實は身體中ぶる〳〵震へて居ながらも、至つて平靜な聲で、イヴン・ペトローヴイチは父に向つて、不德を以て自分を責める要のない事、假令自分は自己の過失を辯明するを欲しないまでも、尙旦自己の過を改たむるに吝ならざる事、あらゆる

偏見に對して自分が超越して居る事を思へば思ふほど、ます〳〵以上の事に對して快く所決する事、それから更に自分は實際マラーニャと結婚しやうと思つて居るのだと云ふ事までも話した。是等の言葉を發するに當つて、イヴン・ペトローヴイチは明らかに自分の目的を達した。父の驚きは非常なものであつた。眼をぽかんと開け、暫くは云ふべき言葉もなく呆然として居たが、間も無く我に返ると、果せるかな栗鼠の毛皮で飾つた寛衣を着て素足にスリッパを突掛けざま、拳固を固めてイヴン・ペトローヴイチに飛びかゝつて來た。息子の方は前から期してゞも居たかのやうに、其の日は髪をティッス風に梳し、青い色の襟の新しい英國式の上着を着、小さひ房飾の付いた深靴を穿き、きつちりと仕立てた流行の毀皮のヅボンを穿いて居た。其の場の樣子を見て母はあらん限の聲を立て、兩手を顔に押當てゝ泣き叫んだが、息子は家の中を驅け拔けて、庭へ飛び出し、剪裁畑を拔け、花園を拔け、果は往來へ飛び出して、側目も觸らず夢中で驅けた。

と後の方からどしん〳〵と云ふ父の足音が聞えて、切なさうに叫ぶ聲まで聞えた。

『待てー馬鹿野郎！待たんと承知しないぞ！』

イヴン・ペトローヴイチは近所の小百姓の家へ逃げ込んだ。ピョートル・アンドレーイチは疲れ切つて汗みどろになつて歸つて來た。そして息をつぐ隙も無く、息子の事は一切最う關はぬ、斷然癈嫡して了ふと云ふ事、彼奴の馬鹿げた書物は殘らず燒棄てゝ了ふと云ふ事、それからマラーニャは早速何所か遠い田舍へ遣つて了ふと云ふ事を告げた。それを聞いた親切な人達はイヴン・ペトローヴイチを見付け出して、一切の事を知らして下れた。侮辱を感じ憤怒に驅られた彼は、父に對して復讐しやうと誓ひ、其夜マラーニャを乘せた車を道に待伏せして、無理にそれを奪ひ取り、近くの町へ連れて行つて其所で逐々結婚した。費用は總て近所の、人の善い退職海軍士官が出して下れた。其人は名うての大酒飲家で、同時に所謂「小說的な身の上話」の如何なる種類の事にも、酷く血を躍ら

す質の人であつた。

驅落の翌日、イヴン・ペトローヴイチは冷かし半分な落付きくさつた丁寧な手紙を父の許へ送つて置いて、其のまゝ自分は復從弟のデミートリ・ペストフが妹のマルフア・チモフエーヴナと一緒に住んで居る村へと出懸けた。彼は其所で事の始終を打明け、ペテルスブルグへ行つて何か職を探す意である事を告げ、それに就け暫くの間自分の「妻」の面倒を見て貰ふやうにと懇願した。「妻」と云ふ言葉を口に出すに及んで彼は涙を流した。そして都育ちの而も新しい頭を持つて居るにも拘らず、彼は努めてロシヤの風に倣つて、親戚の者の足下へ低く頭を下げ、額を地面へ擦付けるやうにした。親切な情深いペストフ家の人達は直に其の要求を容れた。其所で彼は其家に二週間程滯在して、人知れず父からの返事を待つて居たのだ。が、返事は遂に來なかつた。實際返事の來る機會が無かつたのだ。ピヨートル・アンドレーイチの方では息子の結婚を聞くと、寐床へ入

り込んで、自分の前でイベアン・ペトローヴイチと云ふ息子の名を口にすることすら禁じて了つた。が、母は父に知らさずに寺の坊さんから五ルーブルを借りてそれを息子の所へ送り、それに添へて小さな聖像を嫁の所へ届けさせた。母は手紙を書く事を氣遣つて、一日に五十哩も歩くと云ふ痩せた百姓を飛脚として、息子の許へ自分の思を傳へさせた。餘り深く氣を遣ふ事は無い、其の中何うにか成らう。お父さんの立腹も親切に變るであらう。自分だとて他に嫁の當があつたのだけれど、斯うなれば最う何を云つても仕方が無い、マラーニヤ・セルゲーヴナにも母の心をよく傳へて下れ——そんな風に母は情の有りつたけを使に托した痩せた百姓は一ルーブルを貰つて、更に先方へ行つたら、自分が名親になつて居る若奥樣に遇つて來ても好いやうにと賴み、夫人の手に接吻して大急ぎで出懸けた。

こんな風でイヴン・ペトローヴイチは氣輕になつてペテルスブルグへ出た

得知れぬ未來が彼を待つて居る。貧の一字は多少心を脅さないでもないが、併し今迄厭で〳〵耐らなかつた田舍生活から脫したのだ。何よりも先づ彼は自分の師を僞らなかつた。ルッソーやディデローや、さてはかの民權說の敎を今や彼は如實に行はんとするのだ。何となく自分の義務を果したやうな、勝利を得たやうな隨つて誇らしいやうな思が彼の心に充ちた。固より妻と別れる事などはさして彼の心を苦しめなかつた。いや寧ろ始終妻と同棲すると云ふ事の必要は、却て多く彼の心を亂して居たのだ。事茲に至つて、彼は更に何か新しい事をしやうと欲した。ペテルスブルグでは、意外にも彼は成功した。其頭既にかのクールタン氏に捨てられて、而も未だ餘命を存じて居たクーベンスキー公爵夫人が、以前娼たる彼に對して濟まぬ事をした憤ひと云ふ所から、知つて居る限りの人へ彼を紹介し、剩へ五千ルーブル——手に殘つて居た財產の殆んど全部——と、それから裏にキューピッドの花枠の中へ彼の名の略字を刻み込んだレピコーヴスキー型の懷中

時計を贈つた。斯う云つた有樣で三日も立たぬ中に彼はロンドンへ派遣されるロシヤ大使一行の中に或る地位を得て、英國の一等帆船（當時は未だ蒸氣船の事を口にする人すらなかつたので）に乘じて海を渡つた。それから數ケ月を經て彼はペーストフからの手紙を受取つた。かの氣の善い地主は、彼に男の子の產れた事を祝つて寄越したのだ。子は一八〇七年八月二十日ボクローヴスコー村で此世に生れた、名は殉敎者フエードル・ストラーチラートにあやかつて、フエードルと付けられた。非常に身體が弱つて居るとかで妻のマラーニャ・セルゲーヴナからは、僅四五行書添へて來たばかりだが、此四五行がイヴン・ペトローヴイチには驚くべき事であつた。彼はマルフア・チモフエーヴナが、妻に讀み書きを敎へて下れたと云ふ事は夢にも知らなかつたのだ。

けれどもイヴアン・ペトローヴイッチは、親としての情から來た快い感味を長く味ひ耽つては居なかつた。彼は今や時の名高いフリーンさてはライス（當時

は未だ然う云ふ風な古典的な名が流行して居た）の舞踏の隨伴者であつた。丁度ディルシットの平和が結ばれたばかりで、世は皆滔々として歡樂の後を追ひ、逸樂の渦中にあつた。彼の頭も亦或る素敵な美人の黑い眼に狂はされて居た。彼は金錢の點では甚だ貧弱であつたが、骨牌には運がよく、多くの知己も出來、有りとあらゆる催しに顏を出した。竟り彼はありたけの帆を上げて走るやうなものであつた。

九

久しい間老ラヴレッスキーは、結婚の事から息子を赦すことが出來なかつた。若しも半年ぐらゐの後に、イヴン・ペトローヴイチが後悔したやうな顏をしてやつて來て、父の足下に身を投伏すやうな事でもあつたなら、父の方では一時は可成に嚴しく叱りもし、又脅す爲めに棒で打つぐらゐはしても、然うした後で快

く赦すことは十中八九まで確かな事であつた。けれどもイヴン・ペトローヴイチはずッと外國に居續けたので、故郷の方の事などは、些しも氣にして居なかつたらしい。

『默つて居れ！何も云ふ事は無いぢやないか』母が撫めやうとする度に、父は斯う云つた。『私が未だ本當に酷い目に遇はさないのは、彼奴有難く思はにやならんのだ、私のお父さんでゞもあらうものなら、彼奴、命がない所だ、無論それぐらゐするのが當然なんだ。』

此のやうな怖ろしい言葉を聞く度アンナ・バーヴロヴナは、唯人知れず十字を切つて居た。息子の妻に就いては、初めピョートル・アンドレーイチは其名を聞く事すら欲しなかつた。隨つてペストフからの手紙に嫁の事が書いてあつたのに對しても、彼は私には嫁なんか無い筈だとか、駈落をした不貞女を疵護ふ事は法律でも禁じてある、そんな事をされるのは、大に好くないことだと云ふやうな

事まで云つて遺つた。併し其後、孫の產れた事を聞いて心を和らげられて、母の健康に注意すべき個條々々を密かに命じたり、自分の手からではないやうにそれと無く僅かながらの金錢を送つたりした。

フエードヤが生れて未だ一年も經たぬ間に、祖母のアンナ・バーヴロヴナは重病に罹つた。此世を去る數日前の事、最早や床を離れる事の出來なくなつた彼女は、人を憚るやうな涙に眼を曇らせて、息のある中に嫁の顏を見て別を告げたい孫の顏を見て祝福を祈つて遺りたいと云ふ事を、坊さんの居る前で夫に告げた。斷腸の思に沈んで居る老人はそれを慰め和めて、直樣嫁の所へ自分の馬車を迎に遣つた。其時始めて彼はマラーニヤ・セルゲーヴナと云ふ名を嫁に與へた。マラーニヤは、息子とマルファ・チモフエーヴナとを連れてやつて來た。何う考へても一人では來れず、又些しでも侮辱される人の前へは自分の身を出したくはなかつたのだ。餘りの驚きに半ば生心地も無くなつて、マラーニヤ・セルゲー

ヴナはピヨートル・アンドレーイチの部屋へ入つた。乳母がフエードヤを抱いて、其の後に續いた。ピヨートル・アンドレーイチは言葉も無くて、凝と對手の顏を眺めた。マラーニヤはピヨートルの手に接吻しやうと近寄つた。が震へる唇は、唯音無き接吻を以て、漸と養父の手に觸れ得たばかりであつた。

『是れは〳〵、好うこそ』と彼は終に口を切つた。『お達者で何より結構。それではまあ奥樣の方へ行きませう』

彼は此方へ近寄つて來て、背を屈めて赤兒を覗いて見た。赤兒はにつこりして小さい白い手を其の方へ伸べた。それで悉皆老人の心持が變つて了つた。

『うん、うん』と彼は云つて、『可愛い奴子さんだ。お前がお父さんの代りに謝るのか。よし〳〵私はお前を捨てはせんぞ。うん、うん、可愛い奴子さんだ』

マラーニヤ・セルゲーヴナは直にアンナ・バーヴロヴナの寢室へ入つて、戸口に跪いた。病人は傍へ來るやうに手招きした。傍へ行くと兩手を廣げて抱き、

子供を賞めそやした。さうしてから今度は病苦の爲めに歪んだやうになつた顔を夫の方へ向けて何か云はうと焦つた。

『分つとる、分つとる。お前の云ひたい事は私に分つとる』とビヨートル・アンドレーイチは云つて、『そんなに氣を揉まんでも好い。此人は居つて下れるのだ私も最う悉皆心が解けたのだから』

漸くの事に力を出して、アンナ・パーヴロヴナは夫の手を取つて、それを唇に當てた。其晩彼女は此世を去つた。

ビヨートル・アンドレーイチは約束を守つた。母の臨終の功德の爲め、且又幼いフエードヤの爲めに彼の好意を息子に傳へ、マラーニヤ・セルゲーヴナは自分の家に留く事にした。階下の二間を與へ、家の一番の上客たるスクレーヒンと云ふ片眼の陸軍少將夫婦にも紹介し、それから二人の小間使と一人の使小僧を當てがつた。

マルフア・チモフエーヴナは遑を告げて歸つた。此家に居る間に、兎角グラフイーラとは氣が合はないで、一日に三度まで衝突した。

初めは哀なマラーニヤに取つて、此新しい境遇は苦しく煩はしいものであつたが、やがてそれに堪へる術を知り、養父にもだん〳〵慣れて來た。養父の方でも日を追うて親しくなり、前には名を口にする事すら嫌ひ、優しさうな言葉の中にすらも、何處か抑へ難い侮辱が見えたが、それが今では、何方かと云へば氣に入ると云ふやうにまでなつた。所が姉のグラフイーラに對しては、マラーニヤ・セルゲーヴナは一番辛かつた。母の生前ですらも、家の全權は殆んど總てグラフイーラの掌中にあつた。父以下の者は、總て彼女の配下に屈した。砂糖の一摘と雖も彼女の認可無くしては出せなかつた。彼女は自分の全權を他の女主人に分つやうな事があるなら、寧ろ死んで了つた方が好いぐらゐに思つて居た。況んや今度來たやうな女主人風情に於てをやだ。一體兄の結婚に就いては、父よりも此のグ

ラフイーラの方が不服であつた。彼女は成上り者の嫂に對しては高飛車に敎へる態度に出た。從つて顏を合せた始めから、既にマラーニャ・セルゲーヴナは其の奴隷となつた。一體が謙遜な每もおづ〳〵びく〳〵して居る其上に、身體の餘り丈夫でないマラーニャが、かの大風で傲慢なグラフイーラの對手を務める有樣は、眞實何んなであつたらう。一日たりともグラフイーラが、對手の以前の地位を思出して、それを思へ、それを思へと云はぬ日とては無かつた。其の事に就いては、マラーニャ・セルゲーヴナ自身は、如何に辛くても已むを得ぬ事と諦めるだけの覺悟はあつた——が、耐へやうとして耐へられぬ事は、フエードヤを自分の手から取去られた事であつた。敎育する能力が無いと云ふので、碌に顏さへ見せて貰へない。子供の敎育はグラフイーラ一人の仕事として、子供は全然其人の掌中に屬して了つた。此の不幸に陷つてから、マラーニャ・セルゲーヴナは夫たるイワン・ペトローヴイチに手紙を出して、繰返し繰返し直にも歸つて

來て下れるやうにと賴み初めた。父ピヨートルも息子に遇ひたいと望んで居たがイワン・ペトローヴイチの方からは手紙が來たゞけであつた。彼は父に向つて妻の事や金錢を送つて貰つた事を深く謝し、自分も早速歸ると云ふ事を約して寄越した——が、彼は歸つては來なかつた。所が一八一二年になつて、遂々彼は外國から本國へ呼寄せられた。七年目の再會に、父は唯息子の身體を抱締めたゞけで、以前の事に就いては一言も云はなかつた。今はそんな事を云つて居る時ではない。ロシヤ全土擧つて敵に當るべき時である。父と子は自分等の脈管には同じロシヤ人の血が、流れて居るのだと云ふことを互に感じ合つたのだ。斯くてピヨートル・アンドレーイチは自ら資を投じて一聯隊の義勇兵を備へた。併しながら戰は終を告げ、危險は過去つた。と、イワン・ペトローヴイチは又しても倦怠を感じ出した。そして又してもかの遠くの地へ、自分が成長した、あの自分に親しみのあるかの世界へ引張られるやうに感じた。マラーニャ・セルゲ

ーヴナには、彼を留める力は無かつた。彼に取つて彼女は餘りに意味が少なかつた。彼女の最も大きな希望すらも水泡に歸して了つた。夫は妻たる自分が是程に望んで居るフエードヤの敎育をも、グラフイーラの手に委ねて置く方が遙に適當だと思つて居るのだ。イワン・ペトロ ーヴイチの哀れなる妻は、最早や此の打擊に堪へる事が出來なかつた。四五日の間些しも口を利かずに、彼女は密りと過した。彼女は最う何としても、物に對抗して行く事は出來なかつた。從つて自分の病氣に對しても、最早や些しも悶へなかつた。口が利けなくなつた時に、死の影が既に顏を蔽ひ去つた時に、彼女の樣子には以前と同じやうな忍從と、永久に物を喞つやうな事のない優しさとが現はれた。無言の忍從を以て彼女はグラフイーラを眺めて、丁度アンナ・バーヴ ロヴナが臨終に夫の手を接吻したやうに、彼女はグラフイーラの手を接吻した。其人に、グラフイーラに自分の一人息子を托す心で、彼女は其の手に接吻した。こんな風にして此の善良で柔和な女の、地上

の生存が終を告げた。今迄自然の生命を吸つて居た大地から、人知れず根拔にされて根を空中に曝して倒れた木のやうに、彼女の命は破られ枯れて、姿は永刼に消失せた。後には何の痕跡も留めず、誰一人嘆き悲しむ者も無い。マラーニヤ・セルゲーヴナの小間使共はそれを憐れみ、ピヨートル・アンドレーイチまで少なからず憐れを寄せた。默々たる彼女の骸も今や老人の眼からは消失せて了つた。『赦して下れい……左樣なら』

寺で最後の告別をした時に老人は斯う呟いた。墓の中へ一掬の土を投込んだ時に彼は泣いて居た。

それから五年も經たずして、老人も亦此世を去つた。一八一九年の冬、モスクワで平和な往生を遂げたのだ。モスクワへはグラフイーラと孫を連れて移住して居たのだが、死ぬ時にはアンナ・バーヴロヴナと「マラーニヤ」の傍へ葬つて下れるやうに遺言をした。

當時イワン・ペトローヴイチはパリーで耽溺の生活を送つて居た。一八一五年が暮れると間も無く、職務を退いて了つたのだ。父の死を聞いて、彼はロシヤへ歸る氣になつた。一方財産を整理する必要もあるし、それにグラフイーラからの手紙に依れば、息子のフエードヤも既に十二歳に成つたのだから、最うそろ〳〵眞面目に教育を始めなければならぬ時なのだ。

＋

イワン・ペトローヴイチは英國狂となつてロシヤへ歸つて來た。彼の短かく刈つた髮、固苦しい襯衣の胸、ケープの澤山着いた裾の長い豌豆色の外套、苦味走つた顏の表情、幾らか無遠慮で居て而も同時に無造作な振舞、口籠り勝な話振、突然の無遠慮な笑ひ、微笑は見せない事、專ら政治又は財政上に限られた會話、燒肉やポルトワインが非常に好きな事——彼の身に關した何から何まで

總て是れ所謂大ブリテーン國の氣を帶びぬものは無かつた。だが不思議な事は、此のやうに英國狂となると同時に、彼が愛國者となつた事だ。少なくとも自ら愛國者と稱するやうになつた事だ。其の癖自分は、ロシヤに就いては知る所少なくロシヤの習慣は聊かも留むる所無く、又ロシヤ語も何方かと云へば妙な喋舌方をし、日常の會話に使ふ言葉は氣乘のせぬ生氣の無いもので、始終フランス語を挾むと云ふ風であつた。

イワン・ペトローヴイチは國への土産に、行政上及び政府の改革に關する二三の題目に就いての手稿を持歸つた。彼の眼に觸れるあらゆる事々物々が、彼に甚だしい不快の念を與へた。就中秩序の無いことが、彼をして最も不快ならしめた。妹と遇つて先づ第一に彼の發した言葉は、根本的の改革を施さうと云ふ事と、以後自分に關するあらゆる物事を、今迄とは異つた秩序で行つて欲しいと云ふ事であつた。グラフイーラ・ペトローヴナはそれに對しては何とも答へなかつ

た。彼女は唯歯をぎり〳〵云はせて、腹の中でこれぢや「何處かへ逃出さなけりやならない」と思つたゞけであつた。けれども彼女は兄と甥と共に田舍へ歸るに及んで、其の心配は直に無くなつて了つた。勿論家の中では多少の變化があつた役立たずや厄介者は、立所に追退けられた。中にも可哀さうなのは、一人は盲で一人は麻痺症で動けなくなつて居る二人の女であつた。それから又カザリン時代の老耄少佐で、馬鹿がゝつた大食をすると云ふ所から、黑麵麭と扁豆だけしか食はされないやうになつたのもあつた。命令は更に、從前からの常客を遠ざけると云ふ事にまで及んだ。そして彼等に代ふるに、遠い所から一人の變な人物がやつて來るやうになつた。それは髮の毛の美しい、瘰癧症の男爵とか云はれる人で、教育は餘程あるが至つて馬鹿げた男であつた。新しい家具がモスクワから仕入れられた。喫壺や呼鈴や洗面臺が應用され、朝飯が今迄とは違つた方式で認められるやうになり初めた。外國產の酒がヴオトカや舍利別酒の代に用ゐられ、下女下

男の制服が新式になり、家の定紋に添へて「in recto virtus」と云ふ格言が書かれた……こんな風ではあつたが、實際に於てグラフイーラの勢力は何等傷けられる所が無かつた。出納の事は猶一切彼女の掌中にあつた。アルサシヤ人の執事が外國から雇ひ込まれたが、グラフイーラと權利を爭つて、主人が庇護つて下れたにも拘らず追出されて了つた。家政と領地の處理に關しても、グラフイーラ・ペトローヴナが矢張事務を執つた。で、イワン・ペトローヴイチの計劃が、彼の所謂混沌たる間に新生面を開かうとするものであつたにも拘らず、萬事は舊の如くに保持された。唯借地料が塲所に依つて騰つたゞけだ。それも女主人の方が餘り嚴しいからで、而も百姓はそれを直接イワン・ペトローヴイチに訴へる事を禁じられて居るのであつた。愛國者たる彼イワン・ペトローヴイチも早く既に同國人に對し非常な侮蔑の念を抱くやうになつた。イワン・ペトローヴイチ制度の滿足に利用されたのは、唯獨りフエードヤあるのみであつた。彼の教育は事實、彼の所

謂根本的の革新を經た、父は專らそれにのみ腐心した。

十一

イワン・ペトローヴイチが外國から歸るまで、フエードヤは前にも述べた通り、グラフイーラ・ペトローヴナの掌中にあつた。母の死んだ時には彼は未だ八歳にもなつて居なかつた。毎日母の顏を見る事が出來なかつたが、併し遺瀨無く母を慕つた。母の記憶、蒼白い柔和な顏、鬱々とした眼付、人を憚るやうな愛撫、それ等の記憶は永久に彼の胸に刻まれた。家の中での母の地位に就いては明かに分りはしなかつたが、自分と母の間には、母が別に破り去らうとするでも無く、縱又破らうとしても破り去る事の出來ない何かしら一種の隔のある事を感じて居た。父に對しては彼は妙に羞んだ。父の方でも固より彼を愛撫するやうな事は無かつた。祖父はよく彼の頭を輕く叩いたり、手に接吻させたりしたが、それ

で居て彼をば阿呆のやうに思ひもし呼びもした。マラーニヤ・セルグーヴナの死後、終に彼は叔母の配下に屬する事となつた。フエードヤは併し叔母を怖れた其のぎら〳〵する鋭い眼差と其の荒々しい聲を怖れた。で、叔母の面前ではウンともスンとも云ひ得なかつた。時に彼が自分の小さな椅子から、一寸でも動き出すやうな事でもあると、叔母は直に叱り付ける。

『何をするの、此子は？ちやんとしてお居でなさい』

日曜日には集が濟むと彼は遊ぶ事を許された。遊ぶと云つても、マキシモヴイチ・アムボーディイックとか云ふ人の著した『象徵と寓意畫』と題する、厚い不思議な書物を一冊預けられるだけであつた。其書物は至極不思議な謎のやうな繪を千枚、雜混交に集めたもので、其繪の一つ〳〵に五ヶ國語で矢張謎のやうな說明が付いて居た。キユピッド――ぶく〳〵肥つた裸體のキユピッドが此本の繪の重な役廻りをして居た。其中の一つで、「咱夫藍と虹」と云ふ見出の付いた下に、

「此の効果は廣大なり」と云ふ説明が附加へてあつて、其の反對の側に「嘴に菫の花を銜へて飛ぶ蒼鷺」と題したのには、「爾等に彼等は凡て知らる」と云ふ題言が付けてある。又「キユピッドと自分の毛皮を甜める熊」と題するの丶下には、「徐々に」と書いてあつた。フエードヤは是等の繪を見ては考へ込んだ。彼は細かい所まで一つ殘らず其中の繪の事は知つて居た。就中或る四五の繪は、毎も定つて彼を空想に誘ふ種となり、彼の冥想の糧となつた。彼は此の外には何の娯しみも慰みも知らなかつたのだ。

語學や音樂を敎へる年頃になつてグラフイーラ・ペトローヴナは、碌に役にも立たないやうなスウエーデン人の婆さんを備ひ入れた。兎のやうな眼をした女で間違ひだらけなフランス語とドイッ語を談し、ピアノも好加減に彈き、就中胡爪を鹽漬にするに妙を得て居た。此の女傅と叔母とそれからワシリエヴナと云ふ老年な下婢との間に、フエードヤは滿四年を過した。彼は屢々例の寓意畫の本を手

に持つて、部屋の隅の方に座つて何時までも何時までも凝として居る事があつた天井の低い部屋にはゼラニヤムの香が充ちて、一本だけ點した蠟燭がぼんやりと燃えて居る。蟋蟀は物倦げに單調な歌を唄ひ、壁には小さな時計が忙しさうにチックタックと刻んで居る。鼠が一疋こそ〳〵と爪を搔いては、壁紙を嚙んで居る。三人の婆さん達が恰で運命の女神のやうな格好で、手早く音も無く編針を運ぶ、影が手の動くに連れて、驅けつこをして薄暗い中にちらつく。幼兒の頭の中には奇妙な、譯の分らぬ取留の無い考へが群つた。

誰一人としてフエードヤを面白い子だと云ふ者が無かつた。何方かと云へば、彼は色艶の好くない、それで居て身體のがつしりした無格好な、加之に無作法な兒であつた。縱から見ても横から見ても土百姓に出來て居るとグラフイーラ・ペトローヴナはそんなにまで云つて居た。顏色の惡いのも屋外へ度々出るやうに許されゝば好くなるに極つて居るのだ。時々惰ける癖があつたけれども、物の覺え

は可成に早かつた。泣くと云ふ事は無かつたが、時々恐ろしく駄々を捏ねて、誰の手にも終へぬ事があつた。フエードヤは周圍の人には一人として懷かなかつた……歳の若い時分に、人に懷く事の無かつた者は實際氣の毒なものだ。斯う云ふ有樣で居る所へイワン・ペトローヴイチがやつて來た。そして一刻の猶豫も無く、自分一流の制度を其子の上にも應用し始めた。

『私は何よりも先づ、彼を一個の人間に仕上げたいと思ふんです。唯獨り人間と云ふばかりでなく、スパルタ人の如く剛勇なる人間にしたい』斯う彼はグラフイーラ・ペトローヴナに云つた。其處で先づ手始めとして、息子にスコットランド人の着るやうな短袴を穿かせた。十二歳にも成る子が膝を露出にして、スコットランド帽に鳥の羽を附けたのを冠つて、外へ出歩かされるやうになつた。スウエーデン人の婆さんが解傭されて、其代りに、體操に熟達したスウイツル人の若い家庭教師が傭ひ入れられた。音樂は人間として無物な長物であると云ふので禁じ

られ、自然科學や、國際法や、算術や、それからジャン・ジャック・ルッソーの教に從つて必要と認めた木匠術、士氣を鼓舞する爲めの家格とか紋章とかの學問、竟りそれ等のものが未來の所謂「人」たるべき少年の爲す可き事となつた。朝は四時に起き、起きると直に冷水を浴び、それが濟むと、上から下げた繩に捕捉つて高い竿の周圍をくるり〳〵と驅廻らねばならなかつた。食事は一日に一度しか食べられず、加之にそれが一皿に定つて居た。馬に乘る事、弩を射る事も努めて行らせられ、獨適宜の機會には、毎も親の例に倣つて意志を強固にするやうな修養をさせられた。それから毎晩必ず、其日の事件や印象を特に其の爲めに出來た帳面に書かされた。イワン・ペトローヴイチの方では、フランス語で色々の教訓を書いて下れた。其中でフエードヤの事をモンフイース（私の息子）と書き、ブー（貴樣）と呼んで居た。ロシヤ語で談す時には、フエードヤは父には『貴方』と云ふ言葉を使つたが、父の前では坐る事さへし得なかつた。

制度は少年を眩惑せしめ、其の智能を攪亂し索制した。其の代り一方では此の新しい生活のお蔭で健康が助長された。初めは發熱して苦しんだが、直に回復して日に〳〵頑丈になつた。父は息子を自慢して、「我が創造たる自然の兒」と云ふやうな意味の、一種妙な隱語を用ひて彼を呼んで居た。フェードゃが十七歳になつた頃、イワン・ペトローヴィチは機を見て、異性に對する侮蔑の念を息子の頭へ泌込ませて措く義務を思ふやうになつた。かの若きスパルタンは、感情に於ては臆病であり、口元には未だ漸と毬毛が見え出したくらゐではあつたが、身體の中には青春の力と血とが充ち〳〵て居て、既に最う自分を無頓着らしく、冷淡らしく、將又粗暴らしく見せやうと試る程になつて居た。

然斯する中に時はずん〳〵過ぎて行つた。イワン・ペトローヴィチは一年の大半は、先祖傳來の主なる領地であるラヴリーキーで送るやうにして居た。が冬には自分一人モスクワへ行くのを常とした。モスクワでは宿屋に泊つてせつせ

と倶樂部へ通ひ、到る所の客間で演說を行つたり、種々な計劃を展開したりした舉動に於ては以前よりも餘程英國式の度を加へ、益々口彌暄しくなり、益々政治家的になつた。所がかの一八二五年になつて、非常に不幸な目に遇つた。友人知己は多く悲境に陷つた。彼は慌て〳〵田舍へ引込み、門を閉ぢて再び出でなかつた。斯て又年は暮れた。と、急に身體が弱くなり、怏々として日を送るやうになつた彼の健康は其時既に挫け出したのだ。自由思想家たる彼は、今や敎會へ行つて、自分の爲めの祈禱をして貰ふやうになつた。ヨーロッパ人たる彼は、今や蒸氣風呂に坐り、十時に晝飯を食ひ、九時に寢床へ入り、老執事の饒舌を聞きながら居眠りするやうになつた。政治思想の把持者たる彼は、今や計劃の總てを燒棄て、書信の總てを燒棄て、役人の前でおど〳〵するやうになつた、鐵のやうな意志の人たる彼は、今や齦を痛めたり、冷たいスウプの皿を當合はれたりする時にも、泣聲を立て〳〵ぶつくさ云ふやうになつた。玆に至つて家政

の全權は再びグラフイーラ・ペトローヴナの手に歸し、又しても監督や執事や百姓共が裏口へ來て、召使共から「鬼婆」と云ふ名を付けられて居る其人へ、種々の言上をするやうになつた。イワン・ペトローヴイチの變化は息子に強い印象を與へた。息子は最う十九になつたので、そろ〳〵反省の時となり、重荷の如く自己を壓する手から開放を企つる時となつたのだ。こんな事になる前から既に彼は、父の言行に不一致の點あるを認め、父の寛大な自由な言說と、其の苛酷な狹小なる專制との間に矛盾の點ある事を認めて居た。が、それかと云つて、此のやうな根本的の破壞が出來やうとは全く豫想外であつた。父の執拗なる主我主義は今や何事の上にも現はれて來た。

然斯して居る間に、若きラヴレッキーが大學へ入る準備の爲めに、モスクワへ行く支度に取懸つた所へ、又もや父の身に思ひがけ無い災厄が振懸つて來た。僅か一日の中に、父は眼が潰れて取返しの付かぬ盲目の身と成つたのだ。

ロシヤの醫者に信用を措かぬ所から、彼は外國へ行く許可を得やうと手を盡した。併しそれは拒絕されて了つた。其所で彼は息子を連れて全三年と云ふもの、あの醫者から此の醫者へ、此の町からあの町へと、ロシヤ中をうろつき廻つた。何分にも彼の氣が小さくて忍耐の無いのには、醫者も息子も召使も絕望の外なかつた。彼は眞實の敗殘者となり、涙脆い班氣の多い赤兒のやうになつて、再びラヴリーキーへ歸つて來た。苦しい日が續いた。誰も彼も皆一樣に弱らせられた。イワン・ペトローヴイチは、以前にはこんなに迄意地穢く大食はしなかつたが、今では食事をしてさへ居れば優しくして居るが、然うでないと自分も人も、心を安んじて居ることが一刻も出來ないやうにむづかつた。彼は祈禱もした。自分の運命を咀ひもした、自分の身を罵りもした。政事をも自分の制度をも罵つた。以前には吹きもし誇りもしたあらゆる物をも、息子に對して模範として示したあらゆる物をも今は罵つた。今は最う何物も信じないと云ふかと思ふと、其

の口の下から又しても祈禱をする。一刻も獨りで居る寂しさに堪へなくなり、晝となく夜となく始終家の者が枕元に居て、色々な話をして自分を慰めて下れる事を望んだ。其の癖話を聞いて居る時は、『嘘ばかり吐く』とか、『くだらない事を云ふな』とか怒鳴つては、始終話の腰を折つて居た。

グラフイーラ・ペトローヴナは特に彼に取つては必要であつた。其人が居なくては、彼は最う何とも仕様が無かつた。グラフイーラは最後まで、病人の班氣に應じて世話をして下れて居た。それでも時には病人の云ふ事に、直應ずる事の出來ないやうな場合もあつた。恐らく聲の調子に內心の腹立たしさが洩れるやうな事もあつたであらう。こんな風な間に二年と云ふもの、ぐず〳〵で過ぎたが、遂に五月初めの、とある日、バルコニーの日向へ連出して貰つたまゝ此世を去つて了つた。

『グラフイーラ！グラフイーラ！肉汁を、肉汁を、馬鹿』

硬張つた舌でぶつくさ云懸けて、「馬鹿」の「鹿」を云切らぬ中に、息が絶えて永久に默つて了つた。折柄執事の手から肉汁のコップを取らうとして居たグラフイーラ・ペトローヴナは、偶と手を止めて兄の顏を覗き込み、徐ろに十字を大きく切つて、無言の儘其場を去つた。折よく其場に居合せた息子も亦一言も口を利かなかつた。彼はバルコニーの鐵欄に靠れて長い間凝と庭を見詰めて居た。庭は馥郁たる薫と綠の色とが充渡り、金色をした春の日光の中に耀いて居た。彼は時に二十三歲であつた。如何に悲慘に、如何に速かに、彼が二十三年の年月の過去つた事ぞ……生活は今や彼の前途に開けた。

十二

父の骸を葬り、領地の整理や執事の監督を相變らずのグラフイーラ・ペトローヴナに委して、若きラヴレッキーはモスクワへ去つた。彼は漠然とはして居

るが、併し強烈なる引力がモスクワへ自分を引付けるやうに感じた。彼は自分の教育の欠陥を認め、能ふ限り失はれたる地盤を再び盛返さうと決心した。最近の五年間に於て彼は多くの書物を讀み、種々の事物を見た。種々な取留めの無い考が彼の頭に去來した。學者から見たらば或は彼の知識を羨む者もあつたらう。併しそれと同時に、遠の昔に學生などが知つて居る事で彼の知らぬ事は多くあつた。ラヴレッキーは人と我との限界を知り、心秘かに自分の非常識である事を自覺して居た。英國心酔者たる父は、息子を飛んでもない弄び物にした。彼の氣紛れな教育は其効果を現した。永年の間息子は譯も無く父に服從して居た。で彼が遂々自分で自分を省み出す頃には最う悉皆父の感化に染まつて居て、習慣は深く根を固めて居た。兎角人と打解けない方で、二十三にもなつて、羞み勝な心の奥には愛に對する癒し難い渇望が燃えて居るにも拘らず、未だ女の顔も正面に見る事が出來ぬと云ふ風であつた。明確な、併し何方かと云へば重苦しい彼の知力を

欠

MISSING

して居た頃からであると云ふ事、などを友の口から知つた。情熱家のミハレーヴイチの事だから、ワルワラ・パーヴロヴナの事を談すにも熱烈な讃辭を以てした。

『ねえ君』と獨特な烈しい甲高な聲で彼は叫んだ。『あの少女は實に驚くべき代物だ。天才で、本當の意味の藝術家で、それに人柄も非常に善い』

ワルワラ・パーヴロヴナが何んな印象を與へたかと云ふ事を、ラヴレッキーの問から充分に感付いて、彼は自分の方から紹介して遣らうと云出した。自分は恰であの家の者のやうにして居ると云ふ事、將軍は些しも見識振らない人だと云ふ事、それから母は鵞鳥を叱る事も能う爲ない程なのろまである事、そんな事まで談した。ラヴレッキーは眞紅になつて、何やら譯の分らぬ事をぶつ〳〵云つて其所を驅出した。それから五日間と云ふもの彼は自分の憶病と戰ひ續けた。六日目になつて此のスパルタ式の青年勇士は、漸との事で新しい服を着て、ミハレー

ヴイチの指揮の下に立つた。ミハレーヴイチの方は隔ての無い仲なので、手づから髪を梳すくらゐにして措き、其所で二人は相伴つてコロビイン家を指して出懸けた。

十三

ソルワラ・バーヴロヴナの父バアヴエル・ペトローヴイッチ・コロビインは退職の陸軍少將で、在職中ペテルブルグに居た。若い頃は舞踏に於ても練兵に於てもなか〳〵評判が好かつた。だが兎角貧乏であつた爲めに、餘り名聲の揚らない二三の將官に副官として事へて居た。そして其の將軍の一人から、二萬五千ルーブルの持參金を添へて娘を妻に貰つた。彼は微細な點に至るまでも、操練並に演習に關する學理の凡てに通達し、專心軍務に從つた。斯て二十五年勤續の後に至つて將官の地位を得、聯隊に長たるを得、玆に始めて勞を休め、靜かに財

産の基礎を固めやうとするに至つた。其の事は固より彼の心に期して居た事ではあるが、併し彼は實際に當つて事を處するに稍慎重でなかつた。彼は公金で投機を行る一の新方法を考へ出した。方法それ自らに於ては甚だ好いのであるが、併し彼は好く賄賂を使ふ事を忽にして居たので、其の結果告訴されて、不快と云ふ言葉では盡せない程な忌はしい疑獄が相次いで起つた。それでも多少は身の明りを立てる事も出來たが、結局彼の官途は玆に斷たれて了つた譯で、人からは頻に退職を勸告された。それから二年間ペテルスブルグを徘徊いて、何か好い公職にでも有付かうと望んで居たが、是れと云ふ好い口も遂に見付からなかつた。其中に娘は學校を卒業する、入費は日に〳〵嵩んで來る。自分でも最う是では と見切を付けて、生活費の非常に廉く行けるのを目當に、思ひ切つてモスクワへ引移る事とした。そして彼地の古厩町と云ふ所に、小さい、天井の低い、剩に屋根には七尺もある長いエスカッチャンの付いた家を手に入れて、其所に愈々一年に二千

七百五十ルーブルの收入で、モスクワ住の退職將軍生活と云ふものを始めた。由來モスクワは人を遇するに懇ろな都である。迷うて此處に來る者は何時でも歡迎する。就中退職將軍の類は最も好く容れられる方である。斯てのそ〳〵してはゐるが、併し未だ軍人の威嚴を失ひ盡しては居らぬバアヴエル・ペトローヴイチの姿が、モスクワ貴族社會の彼方此方の客間で見られるやうになつた。枯れた髪の毛の所々にちよぼ〳〵と殘つて居る彼の禿頭、鴉羽色の襟飾の上に付けて居る彼の聖アン式の汚れたリボン、それ等は舞踏の最中、骨牌卓の周圍に苦い顔をしてのし懸つて居る顔の蒼白い、だらしの無い青年の間に親しまれ出した。

バアヴエル・ペトローヴイチは交際社會に足場を得る術は能く心得て居た。餘り口數は多くなかつたが、併し古い習慣から兎角己れを低くして語る方であつた——就中自分より身分の上の人に對する時は別であつた。骨牌を弄するに細心で、自宅での食事は成丈控へ目にしたが、人と仲間で食ふとなると、六人前ぐら

ゐは平氣で平げた。彼の妻に就ては是れと云つて語るべき程の事もない。名をカリオーパ・カールロヴナと云つた。左の眼に何時も涙を溜めて居て、それを證據に、自分で自分を非常に感じ深い女と思つて居た。彼女はドイツ人の血を享けて居たのである。何時も神經を苛立てゝ居て、妙に營養不良らしい所もあつた。きちんとした天鵞絨服を着、シャツポを被り、錆びたがらんどうの腕環を嵌めて居た。

バアヴエル・ペトローヴイチとカリオーパ・カールロヴナとの間の一人娘であるワルワラ・パーヴロヴナは漸と十七になつた年に寄宿學校を出た。學校では一番美しいとまでは行かない迄も、少くとも一番利發な生徒で、同時に一番の音樂家で、シフアーと云ふ飾章まで授けられた。かのラヴレッキーが此女を見初めたのは、女の未だ十九にもならぬ頃の事であつた。

十四

ミハレーヴイチに案内されてコロビイン家のみすぼらしい客間へ入つて、家族の人達に引合はされた時には、流石の若きスパルタンも脚をぶる〳〵震はした併し其の眼の眩むやうな臆病な情もやがて消失せた。コロビイン將軍にはロシヤ人特有の深切の情に、何か不名譽の事をした人に限つて持つて居る一種の捌けた情味が加はつて、一入其の人を懐き易くして居た。夫人は殆んど最う皆の眼中に置かれない程な女であつた。更に娘のワルワラ・パーヴロヴナに至ると、是れは又何人も其の前へ出ると、打解けずには居られぬ程な落着いた如才のない快活な性質で、加之に人をうつとりさすやうな體容、毎も愛嬌のこぼれて居る眼、すらりとした肩、薔薇色がゝつた白い手、輕やかでありながら何所か弱々しさうな振舞、低く而も心地よい聲色、それ等の總てに亘つて何とも云つて見やう

のない、何か斯う人の心をそゝるやうなやんわりとした微かな物の薫のやうな好味がある。それで居ながら然うふわついて居ない、何所か未だ慎しやかな濕りとした所がある。更に又言葉には云表はせないが、然う云ふ中にも妙に斯う動きつ燃えつする、然うかと云つて臆病とも違ふ何物かゞある。

ラヴレッキーは話を芝居の事に向けて、先日の演技の事などを談した。するとワルワラは早速口を出して盛にモチャロフを論じ初めた。なか〳〵吐息や嘆動詞ばかりで止めては措かず、藝に關しての女性的な洞察力に充ちた僞らぬ觀察をも何かと談した。ミハレーヴイチが音樂の話をし出すと別に氣取つた風もせずに、ピアノに向つて其頃流行り立てゞあつたショーパンの舞踏曲を些しの間違も無くやつて退けた。然う斯うして居る間に午飯の時刻となつた。ラヴレッキーは歸らうとしたが、皆が引留めて歸さなかつた。午餐には將軍が非常に良いラフイットを御馳走した。故々下男をデユブレーまで買ひに遣つたのだ。

其晩遅くなつてラヴレッキーは自分の家へ歸つた。永い間着物も着更へずに、彼は兩手で眼を蔽うて恍惚として夢に醉つて居た。何だか初めて此世に生甲斐の在る事を覺つたやうな氣がする。是れまでのあらゆる假定、あらゆる計劃、あらゆる詮らない物事が、忽然として無の中に消えて、全心を擧げて只一つの感情、只一つの欲望の中に沒し去つて了つた。幸福の欲望である。所有の欲望である。愛の欲望である。甘き女の愛の欲望である。

其日から彼は折に觸れてコロビイン家へ行き出した。それから六月程經て、彼は終に思をワルワラ・バーヴロヴナに打明けて、婚約を求めた。求めは應せられた。それも其の筈で、將軍は既に久しい以前、殆んどラヴレッキーが初めて訪ねて來た其晩から、ミハレーヴイチにラヴレッキー所屬の農奴の數を訊ねて居た程なのだ。ワルワラ・バーヴロヴナとても、此青年の求婚の抑もの始めから、愈々の口切の間際までも、聊かたりとも平常の冷靜を失はず心の

眼鏡は曇らさなかつた。彼女も亦求婚者の素封家たる事を知拔いて居たのだ。カ・リオーバ・カールロヴナは、「家の娘は良い對手を拵つた」（マイネ トホテル アイン シエーネ バルテイ）と思つて、故々新しい帽子を買つた。

十五

こんな風でラヴレッスキーの求婚は應せられたが、其の代り條件があつた。先づ第一に彼は大學を去らなければならなかつた。誰が學生と結婚するものか。歷乎とした地主樣が富豪が、二十六にもなつて未だ學問をして居るなどは、抑も量見違ひではないか、第二に嫁入道具は一切ワルワラ・バーヴロヴナ自身に注文したり買入れたりする事、更に進んでは新郎からの贈物まで自分の方から選ばうと云ふ事であつた。一體この花嫁は頗る實際的な常識の發達した女で、趣味にも富み、安樂を好む念が强く、隨て自分に安樂を得る點でも人並勝れた能力を持つ

て居た。花嫁の此の能力をラヴレッキーが特に感じたのは、結婚式のすぐ後で、花嫁の指圖で買ひ入れた乘り心地の好い馬車に乘つて、ラヴリーキーへ旅行した。その折であつた。身の周圍のもの一つとしてワルワラ・バーヴロヴナの綿密な注意の行届いて居ないものはない。さま〳〵の妙味のある旅行用品が隅から〳〵出て來る。化粧箱や珈琲入の氣持好さ。朝珈琲を出して呉れる時の、ワルワラ・バヴローヴナのにこやかさ。茲に至つてはラヴレッキーは最早觀察するなど云ふ餘裕は更になく、ひたすら幸福の甘酒に醉うて、たゞ最う子供のやうに幸福の渦中へ溺れ去つた。いかなへラキユルス氣取の青年も、今は全く赤兒の如くにあどけなかつた。若い妻の全人格に充ち渡つた魅力は、唯徒らに存するものではなかつた。得知れざる歡樂に對する若い妻の約束も、亦ひとしく無益に消去るものではなかつた。實際に當つて妻の爲した所は、寧ろ約束以上であつたのだ。

所でかのラヴリーキーの邸宅へ着いて見ると、時は夏の眞盛であるのに、家は暗く且汚ない事夥しい。召使は何れも滑稽な昔風な者ばかりだ。けれども新婦は此の事を夫にほのめかす事すら必要だとは思はなかつた。此のラヴリーキーに棲む氣があるのならば、何から何までも自分で改めなければならぬ。第一住居から何とかしなければならぬのだ。併しこんな邊鄙な高原の隅つこ見たいな所に暮さうなど〻云ふ考は、微塵も新婦の頭には無いのだ。で、彼女は丁度天幕の中にでも宿つたやうな調子で、機嫌よく凡ての不便を忍び、大目に凡てを笑つて除ける、そんな風に暮した。マルファ・チモフエーヴナが昔の被後見者であつたラヴレッキーに遇ひに來た時にも、ワルワラ・バーヴロヴナの方ではひどく氣に入つた。が、マルファ・チモフエーヴナはワルワラを好まなかつた獨りマルファ・チモフイエーヴナにばかりでなく、グラフイーラ・ペトローヴナにも氣に入らなかつた。ワルワラは、グラフイーラの爲すまゝに任せて置か

うと思つて居たのだが、コロピイン老將軍は婿の家の事にいろ〳〵と手を出したがつた。是れほどに近い親戚の財産を管理するのだもの、將軍としての體面にだつて係るものでない、そんな事まで云ふのであつた。それ所でない、全く知らぬ他人の財産ですら管理するを彼は惡いとは思つて居なかつたに違ひない。

ワルワラ・パーヴロヴナは甚だ巧に攻擊策を旋らした。自分から出しやばるやうな事はせず。表面は如何にも新婚旅行の幸福に耽り田舍の平和な生活に甘んじ、音樂と讀書を樂じんで居るやうに見せかけて置いて徐々としてグラフイーラの方へ攻めよせた。果然謀は好く行つて、或日グラフイーラは恰で氣でも狂つたやうな見幕で、ラヴレツキーの書齋へ飛び込み、鍵の束を卓の上へ投り出して、自分は最う家政を行ふ任に堪へなくなつた、こんな所に居るのは最う厭だと言ひ出すまでになつた。ラヴレツキーは豫め期して居た事とて、その場でグラフイーラの去ると云ふのに贊成した。是れには流石のグラフイーラ・ペトローヴナ

も呆氣に取られた。斯う成らうとは豫期して居なかつたのだ。

『好いとも』斯う云つて彼女は顏を曇らせた。『妾は最う此處には要らない人間なのだ。誰が斯うやつて妾を妾の阿父さんの家から追出さうとして居るのか、妾にはちやんと分つて居る。唯妾の云ふ事を好く聞いて置いて頂戴、御前さんは最う何處へ行つても家を持てないに定つてる、御前さんは何うせ放浪者になるんだよ。是れだけ云つて置けば、最う妾御前さんに云ふ事が無い。』

其の日の中に彼女は僅少許しかない自分の所有地へと去つて了つた。それから一週間も經たない間に、最うコロピイン將軍がやつて來て、顏色や擧動に愉快な癖に沈鬱らしい風を見せて、全財産の監督權を全く掌中に握つたのである。

九月になると、ワルワラ・パーヴロヴナは夫を拉してペテルスブルグへ出で、二冬をその地に過した。夏はツアルスコー セロへ暑を避けた。ペテルスブルグでは、奇麗な、明るい、調度に費を盡した家に住んだ。上流社會に多くの

知己をつくり、最上級の交際社會へまで出入した。出る事も多い代りに迎へる事も多く、出來るだけの樂しい舞踏會や音樂の夜會を催した。ワルワラ・パーヴロヴナは燈火が蛾を呼ぶやうに、多くの客を引付けた。併しフエードル・イヴァーニチの方は斯う云ふ浮ついた生活は、固から餘り好まなかつた。それに妻が頻りと官に就くやうに勸めたが、彼は父の舊い聯想と自分の考とから、兎角官職に就くと云ふ事は嫌ひなので、唯最う妻の快樂の爲めばかりにペテルスブルグに爲す事も無く暮した。併しやがては彼も自分獨り引籠つて居るのを何人も妨げる者の無い事、ペテルスブルグ中で最も靜かな最も居心地の好い書齋を自分が持つて居るのは、强ち何の目的も無いのではないと云ふ事、それに又自分の妻は自分を獨り引籠らせて置くやうにちやんと萬事を調へてくれると云ふ事を知りそれからと云ふものは、萬事都合よく行くやうになつた。彼は自分でも考へて居る通り、不十分な自分の教養に、再び身を委ねた。彼は再び讀書をし出した。英

語の勉强すらも再びやり出した。何時見ても机に靠れて居る頑丈な、肩幅の廣い彼の體軀、辭書や筆記帳の上へ半は埋めるやうにして居る髯だらけの赤い彼の顏、何う見ても妙であつた。毎朝仕事に取りかゝつて、正午になると家事に懸けては此上ない腕を持つた妻の手で調へてくれる馳走を食べ、晩には晴やかな若い顏の集つた光と香の夢幻世界へ入り込む。此の世界の眞中にあつても、彼の妻は矢張り好く氣の付く世話女房であつた。

妻の心は男の子の誕生に非常な歡びを感じたが、可哀さうにも子供は永く生きては居なかつた。子供の死んだのが春で、夏には醫師の勸告に從つて、ラヴレツキーは妻を連れて外國の湯治場へ出掛けた。斯う云ふ苦しみのあつた後には氣散じが必要ではあり、且又身體の健康上からも氣候の暖かな所へ行く必要があつたのだ。夏と秋をドイツとスキツツルで送り、冬になつて、誰でも自然に心が向く通り、二人はパリーへ行つた。パリーでは、ワルワラ・パーヴロヴナは

薔薇の花のやうに華やいだ。そしてペテルスブルグに於けると同じやうに、小さいながらも自分の巣を敏速に造つた。パリーの市中の閑静な、それで居て流行社會の人の集るとある町に、非常に奇麗な家を探し出したのだ。其所で先づ夫に今迄着た事のない飾服を着せ、愛嬌のある粋氣な小間使と上等な料理番と當世風な馬丁を備ひ入れ、飾り馬車と非常に良いピアノを備へた。パリーへ來てから一週間にもならぬ中から、彼女は最う恰で生粋の巴里っ子のやうに、街道をも突切るショルも着る、パラソルも差す、手袋も篏めた。そして間も無く自分の周圍へ知己を引付けた。初めはそれでも訪問客はロシャ人だけであつたが、後には甚だ人付の好い、禮儀正しい、そして獨身の、風采の堂々たる、響の好い名前のフランス人までが集つて來るやうになつた。彼等は皆多く語り、口早に話し、頭が低く氣持よく顔をしかめる。白い齒は薔薇色の唇の蔭に輝く――それに笑顔を美しく見せるに如何にも巧い。斯う云ふ連中は、次ぎ〳〵に又自分達の友人を連れて來

る。「ラ ベル マダム ド ラヴレッスキー」（美しいラヴレッキー夫人）の名は、忽ちにしてシャッセ ダンタンからリユー ド リイユに至るまで知れ渡つた。當時（一八三六年）は未だ今日のやうに、蟻塚を蟻が匍ひづるやうに四方八方を泳ぎ廻る新聞記者や通信記者と云ふ種族が起らなかつたのであるが、それですら尙ワルワラ・パーヴロヴナの客室には、エム・ジユールスとか云ふ怪しげな風をした一人の紳士が現れた。忌はしい評判のある男で、傲慢な上に下卑て居て、何だか斯う決鬪か笞刑にでも遭つた事のあるやうな男だ。ワルワラ・パヴーロヴナは、此のエム・ジユールスと云ふ男を非常に嫌つたが、此の男が方々の雜誌や新聞へいろ〳〵なものを書くと云ふ所から、仕方なしに迎へて居た。彼は何かにつけて絶えず夫人の名を引き合に出した。或時は「……tzki 夫人と呼び、或時は又「……夫人、即ちP……に住む例の著しく丈の高いロシャ婦人」とも云つた。そして全世界、即ち「……tzki 夫人とは何の關係もない毎日の讀者に向つて、その

人の美しさや愛らしさを告げた。「心底からのまがひないフランス婦人」（ウンヌ・フランセーズ・パール・レスピリエ）であるとも云つた。フランス人としてはこれ以上の讃辭がないのだ

更に彼女を素敵な音樂家であるとも云つた。驚くべきワルツの妙手であるとも云つた。實際ワルワラ・バヴーロヴナはワルツが巧かつた。輕く飜る裾の襞へあらゆる人の心を引きつけてしまふ程巧かつた。兎に角に彼エム・ジユールスは世間中へワルワラの評判を撒いたので、人が何と云はうが、矢張りそれは嬉しい事にはちがひなかつた。

その當時マアス嬢既に退き、ラシエル嬢未だ現れず、パリーの劇界はこれと云ふ花形役者がなかつた。それにも拘らずワルワラ・バーヴロヴナは芝居通ひにつとめた。彼女はイタリヤ風の音樂に醉ひ、コメデイ、フランセイ座で度膽を抜かれ、極端にロマンチックなメロドラマでドルヴアル夫人の藝に泣かされた。殊にリスツが自分の家の客間で二度までも演じてくれた事、そしていかにも深切

に、いかにも氣取らずにやつてくれた事は、何とも云へず面白く樂しかつた。

このやうな樂しい思ひの中に、冬は過ぎた。冬の暮にはワルワラ・バーヴロヴナは、最う宮廷あたりまでも出られるやうになつた。併しフエードル・イワーニチの方は、苦しくてたまらないと云ふ程ではなかつたが、時々は世の中が重苦しく、厭になる事があつた。何だか空虛で仕方がないのだ。彼は新聞を讀んだり、ソルボンヌやフランス大學の講演を聽きに行つたり、方々の會堂で討論の仲間入をしたり、灌漑に關する有名な科學上の著述を飜譯して見たりした。『俺は時を空費しては居ない』かう彼は思つた。『凡て有要の事に費して居る。だが此の次の冬こそは間違なくロシヤへ歸つて仕事に着手せにやならん。』さう云ふ彼の仕事の內容に關して、果して彼は何か明らかな考を持つて居たかどうか、それは頗る怪しい。それ所でない。彼が果して冬になつて、うまくロシヤへ歸られるかどうか、その事すら今からは知り難いのだ。そんな事を考へて居る折から、彼は妻と

共にバアデンへ行かうとして居た。が、或る不意の出來事の爲めに、彼の計畫は全く破壞されてしまつた。

十六

或日ワルワラ・パーヴロヴナの留守に、ラヴレッキーは偶々其の私室へ行つた。ふと床の上に落ちて居る丁寧に疊んだ小さい紙片が眼に留つた。彼は器械的にそれを摘み上げて、廣げて見た。フランス語で書いた次の文句が讀まれた。

『我が親愛なるベチイ天女よ。(私は眞實貴女をバルブやかワルワラなどゝは呼ぶ氣にはなれないのです)あの大通の角で私は徒に貴女を待つて居ました。明日は一時半に是非私の部屋へ來てください。貴女のあの頑丈な人の好い旦那樣は、其の頃は毎も書物に埋つて御居ですね。最一度貴女が敎へてくだ

すつた、あのプーシキンの詩を一緒に歌はうぢやありませんか。『老いたる夫よ殘酷なる夫よ、』あの詩をですよ。さよなら。貴女の可愛い小さい手と足に千度のキッス。ね、待つてますよ』――「エルネスト」より

ラヴレッキーは、何を讀んだのか直には呑込めなかつた。再び讀んで見た。と、頭がぐら〳〵し出して、地面は逆捲く波に漂ふ船の甲板のやうに足の下でゆら〳〵し出した。堪らなくなつて、彼は一時は叫びつ、喘ぎつ、泣きつした。

彼は最う全く何が何やら分らなくなつた。彼は盲目的に妻を信じて居た。欺したり、背いたりするやうな事があらうとは、夢にも思はなかつた。此のエルネストと云ふ、現在自分の妻の情夫となつて居る此男は、未だやつと二十三位の奇麗な子供だ。髮の毛の美しい、小さい反鼻の、髭のちよつぴり生えた――妻の知合中でもまア何方かと云へば一番つまらぬ男だ。それが妻の情夫なのだ。

有耶無耶の中に數分過ぎ、半時間經つた。ラヴレッキーは猶凝と立つて居

る、手には絶體絶命の手紙を握り締め、失神したやうになつて凝と床を見つめて居る。暗の嵐のやうなものが身邊を吹捲いて、蒼白い顔が幾つとなく其中にちら〳〵する。苦しみに胸は痺れ、身は底知れぬ淵へと、刻一刻に落込み、落込んで行くもの〻如くであつた。と、その渾沌の境から、聞慣れた輕い衣擦の音が起つた。帽子を被り、ショウルを着たワルワラ・パーヴロヴナが、其時散歩から急ぎ足で歸つたのであつた。ラヴレッキーは全身をぶる〳〵と震はせて、駈出した。其瞬間彼は妻の體を引斷り、打ちのめす事が出來るやうな氣になつた。少なくとも、百姓共のするやうに、自分の手で妻を叩き殺して了ふ事が出來るやうな氣になつた。ワルワラ・パーヴロヴナは驚いて彼を引留めやうとした。が、彼は只一言『ベチイ』と云ひ得ただけで、其のまゝ家を飛び出した。

ラヴレッキーは馬車に乘つて、自分を町から外へ運び出すやうに命じた。其日は終日終夜彼はたゞ無暗とうろつき廻つた。そして、仕切りなしに立止つては

手を振り苦しんだ。恰で狂氣のやうになるかと思へば、次の瞬間は無暗と笑ひたくなる、時にはもう何だか堪らなく愉快になる事もあつた。朝になつて身神の疲勞と共に、氣が靜まつて來たので、彼は郊外のと或るむさくろしい宿屋へ入つて部屋を求め、疲れた身體を窓際の椅子に落した。と、俄にたまらなく欠が出て來る。最早殆んど眞直に立つ事も出來ないまでに、身體中が疲れ切つて了つた。刻一刻疲勞が出て來るばかりなのだが、自分には最う疲勞の意識すらも無くなつた彼は坐つて、凝と眼を据ゑた。が、何物も考へられない。自分に何んな事が起つたのか、何故自分は此のやうに四肢は疲れて綿の如くなり、口に苦味を覺え、胸の上に石でも載せたやうになつて、此のやうな見知らぬ、空虛な部屋に獨て居るのか、それすら自分には分らなかつた。一體何が彼女を——彼のワルワラをあのフランス人風情に身を任さすやうにしたのか、それに又ワルワラにしてからが、自分の身の過を知りながら、如何して自分の前で以前と同じやうに平氣

に、しほらしく、腹藏なげに振舞ふ事が出來たのか、それも分らぬ。『あゝ俺には分らない』斯う彼の熱に燃えた唇が呟いた。『此の分ではペテルスブルグに居た頃の事だつて分つたもんぢやない』……然うは云ひながらも、矢張り疑ふだけ疑ふ事は能うしない。彼は又欠をして、身體中をぶる〳〵震はした。さま〳〵の憶出——明るい事も、暗い事も——等しく彼の心を苦しめ惱ました。偶とこんな事が心に浮ぶ、何でも五六日前の事であつた。彼女はピアノに向つて、自分とエルネストの前で、あの「老いたる夫よ、殊酷なる夫よ」と云ふ歌を唄つた。あの時の彼女の顏の表情、眼の中の怪しい光、それからあの頰の色——彼は今それを思ひ出した。と、彼は腰掛から起つた。寧是れから彼奴等の所へ行つて、斯う云つて遣りたい。『貴樣達は一體俺をたぶらかさうとなんかするのは間違ひだ。俺の曾祖父は小作人共の肋骨を打射した人だ。俺の祖父は自分で小作人を行つた人だ。』斯う云つて、彼奴等二人共打殺して遣りたい。彼はこんなにも思つた。と、急に

何だか總てが夢であつたやうな氣がする。夢で無いまでも、何だか馬鹿げた冗談事のやうな氣がする。何ア に何でもない。一寸身震して、四邊を見廻しさへすればそれで好いのだ。そんな氣になつて、彼は四邊を見廻した。と、生擒にした小鳥を鷹が抓き裂くやうに、苦悶の爪は深く深く彼の胸に喰込むのであつた。此の苦しみに加ふるに、ラヴレッキーには今二三ケ月も經てば、父となるべき希望があつたのだ。……今はそれ所ではない、過去も、未來も、彼の生涯の凡ては壞敗に歸し去つたのだ。彼は終にバリーへ歸つた。そして例のエルネストの手紙を次のやうな手紙に添へてワルワラ・パーヴロヴナの許へ送り返して遣つた

『封入の紙片は萬事を說明するものと存じ候。因に申し度は小生の御身に對して意外の感ありし事に有之候。常に何事に就けても拔目なき御身が、斯かる貴重なる紙片を落し置くやうなる事のありしは何たる事に候哉』。哀れなラヴレッキーは此の一句を案出し且それをいつくしみつゝ數時間を費した)『小生は

最早再び御身を見るに堪へず、御身も亦小生と顔を合はすを欲せざる事と存せられ候。小生は今後毎年一萬五千フランづゝを御身に仕送り致す所存に候それ以上は到底差上げ難く候。其の中領地の事務所へ御身の住所を送られ度候御身の好むまゝに爲されよ。御身の好む所に暮されよ。さらば幸福に過したまへ。御返事は無用に候』

ラヴレッキーは妻へは返事は要らないと書送つた……併し彼は待つた。返事に對し、此の信じ難く思議し難い事柄の説明に對して、彼は心から渇望した。その日の中にワルワラ・パーヴロヴナはフランス語の長い手紙を書いて寄越した。それは最後の打撃であつた。彼の最後の疑念はそれによつて消された。彼は今に於て聊かたりと疑念を存して居る事の恥づべきをすら感じ始めた。ワルワラ・パーヴロヴナは少しも自らを辯護しやうとはしなかつた。只一つの願ひは彼に逢ひたい事である、むきになつて自分を責めるやうな事はしてくださるな、

そんな事が書いて來た。手紙は所々に涙の痕が見られながらも、何處か冷たい、此方を抑へ付けるやうであつた。ラヴレッキーは苦い笑を洩らして、使の者に「それで宜しい」と傳言て遣つた。それから三日の後には、彼は最うバリーには居なかつた。併し彼はロシヤへは歸らずに、イタリーへ行つたのだ。實際、歸國するのでない限り、何處へ行かうと彼には同じ事であつたのだ。斯くて彼は國の執事へ向けて妻の手當の件に就いての命令を送つた。そしてそれと同時に自分の財産の支配權を總てコロビイン將軍の手から取戻す事、それには決算報告を書いて出すのなんか待つて居なくても好いと云ふ事、それから將軍閣下のラヴリーキー出發に就いてはよく氣を付けて抜目の無いやうにする事などを書送つた。彼はお拂箱になつたかの將軍閣下の當惑の態や、尊大な其の態度やらをあり〳〵と胸に描いた。悲しい中からも、彼は何だか一種の復讐的な滿足を覺えた。更に彼はグラフィーラ・ペトローヴナに向けてラヴリーキーへ歸つてくれるやうに手紙

を出した。彼女に對する委任狀をも書いた。併しグラフィーラ・ペトローヴナはラヴリーキーへは歸らなかつた。そればかりでなく自分には全く無用だから、此の委任狀は取消すと云ふ廣告を新聞にまで出した。

ラヴレツキーはイタリーの或る小さな町に隱れて居たが、それでも心の中では妻の行動に就いて氣を配らない譯には行かなかつた。其後新聞紙上で前からの計畫通り彼女がバリーからバアデンへ行つたと云ふ事が分つた。彼女の名はやがて例のエム・ジュールスの筆に成る記事の中に書かれた。其記事には新聞記者の慣用の戲けた言葉の調子の裏に、同情の籠つた哀惜があつた。フエードル・イワーニチは此記事を讀んで、酷く不快の念に打たれた。其後になつて妻が女の子を出産した事が知れた。それから二月程して、執事からワルワラ・パーヴロヴナが。初めて一季分の手當を請求して來たと云ふ通知があつた。爾來一度毎に惡くなつて行く評判が、妻に關して傳へられた。遂々或る悲喜劇的な話があらゆ

る新聞に喝采を以て報じられた。彼の妻は其事件に於て、餘り好ましからぬ、役割を勤めて居るのだ。萬事は茲に至つて極つた。ワルワラ・パーヴロヴナは一個の「名うて者」となつたのだ。

ラヴレツキーは妻の行動に氣を配る事は最う止めて了つた。併し然うかと云つて急に自分の感情を抑へて了ふ程には成れなかつたのだ。時として彼は何物をも打捨てゝもと思ふ程な妻に對する烈しい憧れに襲はれる事もあつた。何うかして今一度あの優しい聲が聞きたい、今一度あの手を握つて見たい、其の爲めには彼女の罪は最うさつぱりと免してやる事も出來やう……そんなにまで思ふ事さへあつた。併し時の力には爭はれぬ。彼とても强ち人の犧牲となる爲めに生れて來たのではない。彼の健全な本性は時が經つと共に、其の力を恢復して來た。さまゞの事が明らかになつて來た。自分の頭上に落ちた彼の打擊ですらも、最早强ちに不可測のものとは思はれなくなつた。彼は始めて妻を了解する事が出來

た。自分に親しい者は別れて始めて完全に了解する事が出來るものだ。彼は再び以前の興味を恢復して、再び仕事に從事する事が出來た。それにしても以前のやうな熱心な態度は無くなつた。實生活の上から得た經驗と教育との二つに因つて半ば形造られた懐疑が今や全く彼の心に根を据ゑた。彼は何物に對しても冷淡になつた。こんな風で四年を過した。國へ歸りたい、同族に遇ひたい、今度は然う云ふ思が強く起つて來た。で、ペテルスブルグにもモスクワにも滯在しないで、彼は一思ひにかの○——市へやつて來たのだ。私達が彼ラヴレッキーに別れたのは、其の○——市であつた。茲で今一度私達と共に熱心なる讀者諸君に彼の○—市へ歸つて貰ひたく思ふ。

十七

ずつと前に述べた日の、明くる朝の十時頃、ラヴレッキーはカリーチンの家

の入口の階段を登りかけると、中から帽子を被り手袋を嵌めて、リーザが出て來た。

『何方へ？』

『教會へ、日曜ですもの』

『何故教會へなんか行くんです』

リーザは口には出さぬが、驚いたやうに彼を見た。

『是れは何うも失禮』とラヴレッキーは云つた。『僕は——僕はそんを事を云ふ意ではなかつたんです。實はお邊乞に來たんですよ　今一時間程してから郷里の方へ立たうと思ふもんですから』

『此處からは遠いのですか』とリーザは訊ねた。

『二十哩です』

折から戸口へ、レーノチカが、下女に伴はれて現れた。

『妾達をお見限りなさらないやうにね』斯う云つて、リーザは階段を降りた。
『僕の方も御同様お見限りないやうに。それからね』と彼は云足した。『貴女は是れから教會へ行らつしやるんですね。それではお願しますが、行らしつたら何卒僕の事も祈つて置いて下さるやうに』
リーザは一寸立留つて、此方へ振返り。
『大丈夫ですとも』と云つて、此方の顔を正面に見て『貴方の事も祈りますわ。レーノチカ、來らつしやいよ』
リーザに別れてラヴレツキーは客間へ入ると、其處にはマリヤ・デミトリエヴナが獨つきりで居て、ヨードコロンと薄荷の香をぷん〳〵させて居た。頭痛がして、昨夜も終夜苦しんで居たと云ふ事であつた。始めは例の通りの元氣の無い、慇懃な態度で彼を迎へて、次第に話に身を入れた。
『ウラヂーミル・ニコラーイチさんは眞實面白い方ですことね。然うお思ひでは

ありませんか』斯う彼に訊ねた。
『ヴラヂーミル・ニコラーイチと被仰ると？』
『バンシンさんのことですよ。それ、昨日此處に居らした。あの方は大變貴方を面白がつて居らしたんですよ。それにね、是れは内々の事ですが、あの方は宅のリーザにそりや最う夢中になつて居らつしやるんです。眞實ね、彼の方なら家柄は好し、官の地位は好し。それに悧巧ではあり、侍從官ではあるしするから緣さへあれば、妾の方では――母の身として、此上もない事なんです。何しろ皆妾の責任だと思つて居ます。何うしたつて子供の幸福は親に因るのですものね。今日まで善いにせよ惡いにせよ兎に角何事も皆行つて來たのは妾です。何處々々までも子供と一緒に居たのは妾だけなんですからね。竟り子供の教育は一切妾の手一つで行つて來たんです。何もかも妾が教へて來たんです。尤も今ポリユース夫人へ手紙を遣つて女教師を一人世話して貰ふやうに頼んでは居るのですが』

マリヤ・デミトリエヴナはくど〳〵と自分の苦勞や心配や母心に就いて述べ立てた。ラヴレッキーは帽子を手でひねくり廻しながら、默つて聽いて居た。彼の冷やかな、物憂さうな眼付は口まめな夫人を當惑させた。

『では貴方にはリーザは何んなに見えますでせう』

『リサウエータ・ミハロヴナさんは、非常に好いお娘ですよ』とラヴレッキーは答へて、やがて立上り、暇を告げて、此度はマルフア・チモフエーヴナの所へ行つた。マリヤ・デミトリエヴナは酷く不興氣に其後を見送つて、『何てまア阿呆な、土百姓だらう。あれでは、女房に馬鹿にされるのも無理は無い』そんな事を思つた。

マルフア・チモフエーヴナは自分の居間で、近從の者共に取卷かれて座つて居た、近從は五人で、何れも甲乙なく彼女の氣に入つて居た。一は餌蠱の大きな種々の事を敎へ込まれた駑で、口笛の音を出したり水を汲んだりする藝が出來な

くなつた爲めに、却て主人から情をかけられて居る。次は非常に臆病な、温和しい犬で、名をロスカと附けられて居る。それから怒りつぽいマトロスと云ふ猫。色の黑い、活潑な、九つになる、眼の大きな、尖り鼻の、シューロチカと云ふ小娘、最う一人五十になる婆さんで、白い帽子を被り肉桂色の短いジャケツを黑いスカートの上に着た、ナスターシャ・カールポヴナ・オガルコフと云ふのが居る。シューロチカは商人の家に生れた孤兒であつた。マルフア・チモフエーヴナはロスカと等しく、憐愍の情から其孤兒を可愛がつて育てた。其小犬も小娘も共に街で見付けたのだ。何れも疲せて、飢ゑて、秋雨に濡れしよぼたれて居た。ロスカは誰も探しに來た者は無かつたが、シューロチカの方は叔父に當る醉漢の靴師が、マルフア・チモフエーヴナに賴み入つて取立てゝ貰つたのだ。其男は實際自分さへ食ふに困つて居た程で、姪を養ふなどは到底も出來る事では無かつたのだが、それで居て始終シューロチカの頭を打通して居たと云ふ事だ。ナスターシャ

カールボヴナは、マルフア・チモフエーヴナが或る僧院へ禮拜に行つた時始めて知つたのだ。何でも其女の祈禱の言葉が大變氣に入つて、教會堂の中で自分の方から其女の所へ行き、茶を飲みに來るやうにと誘つたのが縁で、其日から最う一寸も手放し得ないのだ。ナスターシヤ・カール ボヴナは、至つて快活な優しい氣質の女で、零落貴族の、子無しの寡婦であつた。斑白の圓い、格好の好い頭をして、手はしなやかで白く、鼻だけは不釣合にも反り鼻であつたが、顔容は全體に大きくふつくりして柔和な方であつた。マルフア・チモフエーヴナに對しては畏敬の念を以て事へて居たが、此方の方では其の何事にも感じ易い性質を笑ひながらも、非常に其女が氣に入つて打解けて居た。ナスターシヤ・カール ボヴナは歳にも似合はず、凡ての青年に對して妙にうぶな所のある女で、至極つまらない戯談にも恰で小娘かなんぞのやうに、顔を赤らめないで居る事の出來ないやうな性質であつた。財産は總てゞ千二百ルーブルしかないので、生活費はマルフア・チ

モフエーヴナが出して居たが、併し相互の關係は凡て同等にして、マルフア・チモフエーヴナの方でも聊かたりとも勤めらしい事はさせないやうにして居た。

『あら！フエードヤ』對手の姿を見ると直ぐマルフア・チモフエーヴナの方から口を切つた。妾の所の人達には、昨夜はお前さん逢はなかつたんだね。何うだえ、賞めてお下れでないか。丁度お茶に集つた所でね。二度目の、是れがお休み日のお茶會と云ふ譯なんだよ。さア皆と一つ近親になつて貰ひませう。尤もシユーロチカだけは難しいもんだ。それに其猫はお前さん引掻かれるよ。それは然うと、お前さんは何うしても今日御出發なのかえ』

『えゝ』と答へてラヴレッキーは低い腰掛に坐り『今マリヤ・デミトリエヴナさんに暇乞をして來た所なんです。リサウエータ・ミハロヴナさんにも逢つて來ました』

『リーザと云つたら好いぢやないかえ。ミハロヴナなんて、お前さんが云はな

くても好いのだもの。それは然うとまア靜かにお坐りよ。でないとシユーロチカの小さな椅子が破れて了ひます』

『何でも教會へ行らつしやる途中でした』とラヴレツキーは言葉を繼いで、『そんなに信神深い女なんですか』

『そりや最う大變な信神家なんだよ。お前さんや妾なんかよりはねえ』

『では貴女は信神はなさいませんのでせうか』とナスターシャ・カールポヴナが氣を兼ねるやうに小聲で云つた。『今日は朝御勤には行らつしやらなくつても、晩の集りには行らつしやいますので御座いませう』

『いえ、止しませう。お前さんだけ行らして下さい。妾大變何だかおつくうになりました』とマルフア・チモフエーヴナは答へた。『悉皆最うお茶に釣込まれて了つたんですね』

マルフア・チモフエーヴナはナスターシャ・カルーポヴナを呼ぶに『お前さん

欠

MISSING

く好い。バンシンちや到底も充分な對手にはなるまいて。彼奴何うも怪しからぬ量見方をして居る。だが一體、俺は何故そんな事に氣を揉むんだらう。リーザだつて彌張世間の女共と同じ道を行くんだ。充らん事を考へて居るより、まあ眠た方が上策だ』こんな風に思つてラヴレッキーは結局眼を閉ぢた。

併し彼は眠る事は出來ずして、却て懶い旅の幻想に引込まれた。過去の幻は前と同じく次第に彼の頭の中に湧起り、心の中を漂ひ廻つて、他の種々な幻想と混じ去り、混じ來つた。ラヴレッキーは何の譯も無くロバート・ビールに就て考へ始めた……フランスの歴史に就て考へ始めた。若し彼ロバート・ビールにして將軍であつたとしたら、何んな風に戰爭に勝つたか、そんな事まで考へた。彼は目の邊銃砲の響叫喚の聲を聞くやうな氣がした。偶と頭が一方へがくつとなつたので、彼は眼を明けた。眼に映ずるものは依然として同じ野原、同じ高原の景色であつた。外側の馬の磨き立てた蹄鐵が立迷ふ埃の中に交る〳〵光つた。赤い三

角片を着けた黄色な馭者の襯衣が風に膨らんだ。『眞實好い歸省だ』と云ふ考が燦とラヴレッキーの頭に浮んだ。

『早く行れ』

斯う彼は叫んで、外套を緊りと身に着け、クションにぴつたりと身體を押付けた馬車ががたつと云つた。ラヴレッキーは身を起して、眼を廣く見開いた。行手の だら〳〵下りに小さい村が開けた。其村の右手に、窓を締切つた、廻り縁つた階段のある古風な小さい館が見られる。門からかけて廣い庭一面に、麻のやうに青々として深く蓴麻が生えて居る。其の中に、槲の木造の倉が未だ丈夫さうに立つて居る。愈々其處がヴシリエヴスコーだ。

馭者は門の傍まで行つて馬を止めた。ラヴレッキーの侍僕は馭者臺の上に突立つて飛降りやうと身構へて居るもの〻如くに、『おーい』と叫んだ。眠たさうな く〻み聲の犬の啼聲がしたが、一疋の犬すら姿を見せなかつた。侍僕は又しても

飛降る身構へをして、『おーい』と叫んだ。弱々しい犬の啼聲が繰返された。と、其の聲の終るか終らぬに、何處かの隅から一人の男が驅出して來た。南京木綿の服を着た、頭は雪のやうに白い老爺だ。彼は手を翳して日を避けながら、馬車を眺めた。と、驚いたやうに兩手で股を叩いて、暫く彼方此方を走り廻つて居たが、やがて門を開けにと驅けて來た。馬車は邸内に引込まれ蓴麻を挽きしだいて、階段の所で留められた。非常に快活さうな件の老爺は、既に最う階段の上り口に立つて居た。脛は屈つて、妙な格好に開いて居る。老爺は馬車の前垂を解き、革紐を引つたくつて取外し、手を添へて主人を降し、やがて主人の手に接吻した。『丈夫で何より、何より』とラヴレッキーは口を切つた。『お前の名は確アントンだつたなあ。好く未だ丈夫で居て下れたねえ』

老爺は默つて頭を下げて、鍵を取りに驅けて行つた。それを待つ間、馭者は身動ぎもせずに凝と傍に坐つて、閉つた戸口を瞶めて居たが、侍僕は片手を馭者臺

に投掛けて、繪のやうな姿勢で飛降りたまゝ、其場に突立つて居た。老爺は鍵を持つて來て、何の益にもならぬのに仰山さうに身體をもぢり、肱を高く上げて、戸を開けた。そして自分は傍へ身を退いて、再び地面へ引着くやうに頭を下げた『さあ先是れで、俺も生れた家へ歸つたと云ふもんだ』と狹い入口を入つた時にラヴレッキーは思つた。と、窓の戸がきい〳〵がた〳〵と云ふ酷い音を立てゝ、次々に開けられた。斯て晝の光は久しく荒れて居た部屋々々へと流れ込んだ。

十九

ラヴレッキーが今歸つて來た、そして二年前にグラフイーラ・ペトローヴナが息を引取つた此の家は、前世紀中丈夫な松の木で建てられたもので、非常に古くは見えるが、未だ此の上五十年以上も大丈夫だと思ふ程緊りして居る。ラヴレッキーは一つ殘らず部屋を廻り歩いた。歳を取つた生氣の無い蠅が楣の下に留

つて白い埃を被つて居る。彼はそれを見て非常に氣持が惡くなり、到る所の窓を殘らず開けさせた。グラフイーラ・ペトローヴナが死んで以來、一度も窓を開ける事が無かつたのだ。家の中の物は凡て昔の儘になつて居た。光澤のある灰色の摩れて糸目の離れた織物を被せた、客間の足の太い、白い小形の寐椅子は、見るからカザリン時代を思はせる。客間には又女主人が遺愛の肱掛椅子がある。高い眞直な背が付いて居て、流石の女主人も年寄つてからは、それに倚懸る事が出來なかつたものだ。壁にはフエードヤの大祖父に當るアンドレイ・ラヴレッキーの非常に古い肖像畫が懸つて居る。黑味がゝつた黃色い顏は、乾割れた上に黑くなつた背景と殆んど見分難くなつて居る。脹れたやうに萎れた臉の蔭から、小さい慘忍らしい眼が惡々しげに覗いて居て、皺の寄つた重苦しげな額の上には、眞黑な、油氣の無い髮の毛が逆立つて居る。肖像畫の隅に、埃に汚れたムカラバナの花環が懸けてある。「グラフイーラ・ペトローヴナ樣にそれを造らつしやるの

を楽しみにしてお居でなすつた」とアントンが話した。寐室には古風ではあるが非常に物の良い、縞の帳の蔭に、狹い寐臺が据ゑてあつて、薄く綿を入れた夜具が床の上に置いてある。枕の上には聖殿に於ける聖母出現の繪の額が懸けてある。かの老婦人が唯一人、凡ての人から忘れられて、此世の息を引取つた。其際まで、刻一刻に冷たくなつて行く唇に押當てゝ居た繪は是であつた。窓際には又、眞鍮製の用具と、綠の錆びて屈んだ鏡の付いて居る象眼を施こした木製の化粧臺があつた。寐室と並んで小さな祈禱部屋がある。全體裸壁で、隅の方に聖像を納めてある大きな箱がある。床に敷いた摩切れて糸目の出た毛氈には、所々蠟の斑點がある。グラフイエーラ・ペトローヴナが其毛氈の上へ頭を擦付けて、祈るのを常として居たのだ。

やがてアントンは厩と馬車小屋を開けにと、ラヴレッキーの侍僕を連れて出て行つた。と、それと代つて今度は、同じ歳頃の婆さんが出て來た。眉の邊り

まで被ぶさるやうにして手拭で頭を包んで居る。頭は絶えずぶる〳〵震へて居るし、眼は酷く霞んで居るらしいが、それで居て、何處か物事にねつさうな、永年の奉公に慣切つたと云つたやうな、そして誠意を捧げて哀傷を共にすると云ふ風がある。婆さんは先づラヴレッキーの手に接吻して、命令を待つて戸口に凝と立盡した。ラヴレッキーは其婆さんの名を、判然と思出せなかつた。そればかりでなく、何處で前に遇つたのであるかと云ふ事すらも思出せなかつた。が後で、婆さんの名はアプラクシャと云ふのだと分つた。四十年前にグラフイーラ・ペトローヴナが母家から追出して、鳥小屋の番をさせたと云ふのは此婆さんであつた。だが、婆さんは餘り談さなかつた。歳の故で氣抜して居るやうだ。婆さんには漸とラヴレッキーの顔を追從的に瞶めるくらゐしか出來なかつた。此の二人の年寄と、アントンの曾孫に當る三人の、長い襯衣を着た太皷腹の子供の外に、最一人此館には服役を免除された片手の作男が住んで居た。山鳴のや

うにぶつ〳〵何が云通して居て、仕事に懸けては何の役にも立たぬ厄介者だ。それにも劣らぬ無益者は、かのラヴレッキーが歸りを啼いて迎へた老耄犬であつた。グラフイーラ・ペトローヴナの命で買はれてから以來、十年と云ふもの重い鎖で繋がれたまゝになつて居るのだが、鎖の重さで身動ぎも出來ないで居る。家の中を一通り見廻つたのでラヴレッキーは庭へ出た。庭は非常に氣に入つた。丈の高い青草や野牛蒡や、グーズベリや、木苺が一面に生へて居るが、それでも日蔭は充分にあつた。目立つて大きな、枝振の面白い菩提樹の老木が多く立つて居る。植方が餘り密に過ぎる上に、百年も前に刈込んだ儘になつて居る。庭の端には、赤味を帶びた葦に圍まれて水の澄んだ小さな池があつた。此世に殘す人間の足跡は、速かに速かに消去つて了ふ。グラフイーラ・ペトローヴナの領園も、未だ荒果てると云ふ程に時も經たないのに、既に最う靜かな眠——人間の不安動搖の汚れなき所、地上の物總て靜かに眠る——其の靜かな眠の底に全く沈ん

で了つたやうに見える。

ラヴレッキーは更に村を通つて見た。小百姓の女共は小屋の戸口から覗き、手の上に頰を載せて彼を眺めた。男共は遠くから頭を下げ、子供等は逃隱れ、犬は呑氣さうに吠えた。

やがて彼は空腹を覺えて來た。併し晩まで待たなければ召使の者も、料理番も來さうにはなかつたのだ。ラヴリーキーから食料品を運んで來る車が未だ來ないで仕方無くアントンに依賴しなければならなかつた。アントンは即座に材料を整へた。歳を取つた牝鷄を捉へて來て、殺して毛を捲つた。アプラクシャは永いことそれを拭いたり洗つたりして、羹鍋に入れるまで恰度リンネルでも洗ふやうにした。で、最後に料理が出來上ると、アントンは卓掛を調へ卓を据る、ナイフやフォークの傍に、錆びた板金で造つた三本足の鹽皿と、圓い硝子の栓のある、口の細い、刻み目のある酒壜を置いた。然して措いてからラヴレッ

キーの所へ行つて、食事の出來た事を抑揚の無い聲で告げた。そしてラヴレッキーが卓に着くと、自分は其の後背に座を占めた。右の手を握つてそれにナプキンを卷付け、身體からは松柏類の木の香のやうな、一種妙な、強い古風な香を漲らして居る。ラヴレッキーはスープを味ひ、中から鷄を取出した。鷄の皮は一面に大きな水泡が出來て居て、足は何れも硬く筋張り、肉は木を嚙むやうでぷンと曹達の香がした。食事が濟むと、ラヴレッキーは、

『お茶が一杯飲みたい。若し――』と云つた。

『今直に持つて參じます』

と老人は主人を氣遣はしさうな言葉で抑へて、やがて言葉通り持つて來た。赤い紙片に包んで捏つてあつた一摘み程の茶が、何處からか探し出された。小さいが沸易くて酷く音のする茶釜が出され、溶けたやうな砂糖の塊も探し出された。

ラヴレッキーは大きな茶碗で茶を飲んだ。其茶碗は子供の時から能く覺えて

居る。面には骨牌の模樣が描いてあつて、來客にだけそれで飲ませた――彼は今來客でゞもあるかのやうに其茶碗で飲んで居るのだ。

夕方になつて召使共がやつて來た。ラヴレッキーは叔母の寢床で寢る事が好ましくなかつたので、食堂に自分のを拵へさせた。蠟燭を消してから後も、彼は永い間周圍を眺めて樂しみの無い回想に耽つた。彼は永い間住む人の無かつた家に始めて夜を過す人の誰でも覺えのあるやうな感じを覺えた。彼は上下左右から自分を包んで居る此の闇は、到底此の新しく住む人には親しむ事の有得ないものゝやうに、家の壁までが驚いて居るらしく思つた。結局彼は溜息を洩らし夜具を被つて眠に入つた。アントンは家中で一番晩くまで起きて居た。永いことアプラクシャと密々話をし、時々低く溜息を洩らし二度まで十字を切つた。自分達の主人があのやうに立派な館のある屋敷が有りながら、こんなワシリエヴスコーのやうな所まで來て、自分等の仲間入などしられやうとは、老夫婦は夢にも思はな

かつた、屹度ラヴリーキーの屋敷が主人の氣に合はぬのだ、苦しい思出があるのだものと二人は思つた。心行くまで喋舌つてから、アントンは棒を握り、夜番の盤を叩いた。其盤は永年の間鳴らさずに懸けてあつたものだ。叩き終るとアントンは白髪頭に着ける物もなく庭の上へごろりと寢た。五月の夜は隱かでやんわりとして居た。老人は氣持好く眠つた。

二十

翌日ラヴレッキーは割合に早く起きて、村長を訪ね、打穀場を見廻り、犬の鎖を解かせた。犬は一寸吠えた限り、犬小屋から出やうともしなかつた。家へ歸つてからラヴレッキーは一種穏かな幻想に耽つて、終日うつら〳〵と其幻想を拂去らずに居た。

『俺は今深い河の底に居るやうなものだ』斯う彼は再三再四獨言つた。彼は身動

ぎもせずに窓際に坐つて居た。そして凝と耳を澄して、身邊を包んだ靜かな生活の流れを聽き、田舍の靜けさの裡から起る少ない物の音を聞くらしかつた。蕁麻の蔭で何とも知れぬものが、鋭い切れさうな聲で唄つた。蚋がそれに應じて唸るらしく聞かれた。と、其の葉蔭の聲が止んだ。それでも猶ほ蚋は鋭い唸り聲を續けた。樂しげな、根氣の好い、ぢれつたさうな蠅の啼聲を貫いて、一疋の大きな蜂の啼聲が響いた。蜂はしつきり無しに天井へ頭を打付通して居る。鷄が往來で鳴いた。其鳴聲の終が皺枯れた聲で長く引張られた。馬車の音が響いた。村の何處かで門がぎいと鳴つた。續いて百姓女のがちや〳〵聲が、

『まあ』

と云つた。

『へえ是れはお孃樣のお來でだ』とアントンは叫んだ。見ると二つくらゐの小さな女の子を抱上げてあやして居る。

『酒持つて來てくれや』と前と同じ女の聲が云つた。

と思ふと、四邊が又急にしーんとなつて、死んだやうな靜寂が續いた。何の音もせず、何の動くものも無い。風は枝を動かさず、燕は音も無く一羽又一羽地面に低く翔ぶ。其の音無き飛翔が妙に哀愁を誘つた。

『俺は今深い河の底に居るやうなものだ』又してもラヴレッキーは同じ事を思つた。『此處では生活は常に靜かだ。常に停滯して居る。此圏内に入るものは誰でも皆、自分の運命の儘に身を任して了はねばならぬのだ。何の動搖も無い。何の苦惱も無い。鍬を持つた百姓が鍬で溝を掘つて行くやうに、唯最う自分で自分の道を徐々に開いて行く事が出來るだけだ。而も此の靜寂無活動の裡に何たる力何たる健康の存ずる事ぞ、窓の下には强健な野牛蒡が厚い草の中から伸出て居る其上に獨活草があの汁液の多い莖を伸ばして居る。更にそれより高く處女涙草が其の淡紅色の卷蔓を伸ばして居る。見渡す限りの野にはライ麥が絹を伸べたやう

に光つて居るし、燕麥は既に最う穗を出して居る。あらゆる木のあらゆる葉、あらゆる莖のあらゆる草葉が嬉がれるだけ嬉がり蔓れるだけ蔓つて居る。一人の女の愛に、又とない青春の幾年を俺は徒づらに費して了つた』とラヴレッキーは更に思ひ續けた。『何うか此の單調な生活の感化で、俺も眞面目になりたいものだそして心を靜かにして焦らずに、自分の仕事を着々と進めて行くやうになりたいものだ』こんな風に考へた後、彼は再び四邊の靜寂に耳を澄した。が、別に何を期待すると云ふではない——而もそれと同時に絶えず何物かを待設けて居る。靜寂は前後左右から彼を包んだ。太陽は靜かに〳〵平穩な碧空の中を移つて行き、雲は穩かに其面を漂ひ去る。其の漂ひ動く故も知らず、又其の漂ひ行く所も知らず、唯最う夢の如く雲は動く。世界の他の場所では是れと時を同じうして、生活の熱鬧があり、慌忙があり、爭鬪がある。が此處では、丁度沼に生えた草の上を水が滑つて行くやうに、生活は何の音も無く滑つて行く。斯て日の暮果てるまで

もラヴレッキーは、過去り移り行くまに〳〵、其の生活の觀照に引込まれて遂にそれから離れ去る事が出來なかつた。過去に就ての悲しみは、春の雪のやうに心の中に溶けつゝあつた。そして不思議にも我家を愛する心が、今までになく深く強く彼の胸に湧起つた。

二十一

二週間かゝつてフエードル・イワーニチは、グラフイーラ・ペトローヴナの小さな家を整理し、庭や花園を綺麗にした。ラヴリーキーからは工合の好い家具が送つて來るし、町からは酒や書物や紙類が送つて來た。厩には馬の姿が見られるやうになつた。竟りラヴレッキーは必要があるだけの品々を調のへて、田舍の地主とも付かず、それかと云つて全くの世捨人とも付かぬ一種の生活を始めたのだ。單調な日は單調な日に續いた。が、彼は別に遇ふ人が無くても、懶く感

ずるやうな事は無かつた。彼は一意專心自分の所有地の耕作に從事した。馬に乘つて近隣を廻り歩いたり、讀書したりした。併し讀書する事は眞の一寸ばかりで、それよりもアントン爺の話を聽く方が餘程彼には面白かつた。ラヴレッキーは、大概はパイプと、冷たい茶を注いだ茶碗を持つて、窓に腰懸けて居た。アントンは戸口に立つて、背中に手を組み、考へ〳〵ずツと以前の話を始める。恰で昔話にでもありさうな時代の話だ。あの頃は燕麥やライ麥を賣るにも、計るやうな事はせず大きな袋で賣つたので、其の一袋の値段が二ルーブルか三ルーブルであつたと云ふ事や、それから當時は到る處に深さの知れぬ森や、誰も手を附けるものゝ無い荒野が、町の直傍までも續いて居たと云ふ事などが話された。

『所が今日では、』と此の八十を越えた爺さんが呟く。『此の通り最う切開かれん所は無く、鍬の入らねえ所は無えやうになりました。馬に乘つて歩ける所もありましねえだ』アントンは又、自分の主人であつたグラフイーラ・ペトローヴナ

に就いて、種々な話をするのを常とした。彼女は如何にも嗜みが好く節儉家であつたと云ふ事、つひ近所の或る若い旦那が緣談を申し込んで、毎も馬に乘つて會ひに來たと云ふ事、それを迎へる爲めにグラフイーラ・ペトロヴナが、鮭肉色をしたリボンの付いた一番大事の帽子を被り、トル、トル、ラバンチンの苗色な着物まで着たと云ふ事などを話した。ラヴレッキーが心に期した古い書類や面白い文書に就いては、祖父のピョートル・アンドレーイチが種々な事を記入した一冊の古い本の外は、是れと云ふ程の物も無かつた。其の古い本の或る所に「セント・ペテルスブルグの都に於ける平和の式典は、アレキサンデル・アレキサンドロヴイッチ・プロッオロヴスキー公爵閣下に依つて、トルコ帝國と共に目出度く結了せられたり」と書いてあつた。又或る所には肺病の煎藥の處方書があつて、それに、「此の處方は將軍夫人プラスコヴヤ・フエーデロヴナ・サルチコフへ、與生三位一體教會の大長老フエードル・アヴクセンチエヴイッチより贈られたるも

のなり」と云ふ註釋まで添へてある。かと思ふと、又或る所にはこんな風の政治上の記事の斷片らしいものが書いてある。「フランスの虎狼輩に就いて語らるゝ事幾分下火となれるが如し。」そして其傍へこんな事が書付けてある。「モスクワガゼットに高級陸軍少佐ミハール・ペトローヴイチ・コリチエフ氏の訴を傳ふ。是れピョートル・ヴシリエヴイチ・コリチエフの息子ならんか。」

ラヴレッキーは更に幾冊かの古曆と夢幻的な事を書いた書物と、それからアムボディクの神秘的な著書とを見付出した。種々の思ひ出が、好く知つては居るが永く忘れて居た此の「表象」と寓意畫」に依つて喚起された。グラフイーラ・ペトローヴナの小さい化粧臺の中から、ラヴレッキーは小さい包を見付出した黑いリボンで縛り、黑い封蠟で封じ、其の上引出のずッと奥の方へ入てあつた。其包の中には二枚の肖像畫が面と面と合せて入れてあつた。一枚は乾彩で描いた父の若い肖像である。女のやうな卷毛が額まで冠さつて、巴旦杏形の疲れたやう

な眼をして上唇と下唇が離れて些し開いて居る。一枚の方は殆んど消えて居るが、兎に角白い着物を着て手に白薔薇を持つた顔の蒼白い女――即ち彼の母の肖像である。其處でグラフイーラ・ペト ローヴナ自身の肖像はと云ふと、是れは一度も肖像を描かせた事が無いので無論在る筈が無い。

アントンはラヴレツキーにこんな事を云ひ〳〵した。『私はな、貴方様のお屋敷には居ませなんだけれど、貴方様の大祖父様のアンドレイ・アフアナシエヴイツチ様は能う存じて居ります。何でも私が十八の歳にお亡くなり遊ばした何時ぞやお庭でお目に懸りました。其時は私は最う膝がが〳〵震へて何うもして見やうがごわせなんだ。それでもな、彼方様では何もなさりませなんで、唯私の名前をお訊ねあつて、俺の部屋へ行つて手拭を取つて來いと被仰つたゞけで御座りましたゞ。眞實立派な旦那でごわしたわい。何でもな、如何な者でも御自分よりは偉いものと思はつしやるやうな事は決してなされなかつた。と云ひます

のも、大祖父様が眞實不思議な護身符を持つて御座つたからの事でごわした。何でもアリスの山から來た行者と云ふのが其護身符を進せたのださうで、其行者の云ふ事には、「ボーヤル、是れは其方の深切の禮に進せるのぢや、是れを身に付て御座らッしやい、審判などは恐るゝに及ばん事ぢや。」何分其の頃の時勢が今とは全然違ッとりましたもんで、家の旦那様が爲やうと思はした事は、何でも思ふ存分になされたゞ。時に依て誰か外の旦那がお氣に逆らふやうな風でも見せやうものなら、家の旦那様は凝と恁う睨み付て置いて、「淺瀬に泳ぐやうな奴が何になる」と斯う被仰つた。それが又お得意の言葉でごわしたゞ。そんな風で住んで御座つたお屋敷ッてのは、小さな木造の家ではありましたが、殘さしやつた財産は大したものでごわした。銀は申すに及ばず、在りと有らゆる寶が積んでごわしたゞ。何の倉庫も何の倉も一杯になつてぎし〳〵、唸つとりましたわい。何て偉い手腕家ぢやごわせんか。貴方様の珍重さつしやる、其の德利もあの方のでごわした。

何でもよくそれにブランデーを入れて飲んで御座つたゞ。大祖父様はそねえでこわしたが、祖父様のビョートル・アンドレーイチ様は莫大な石の御殿を建てさしたゞ。其代り財産は一寸も好くならねえで、何事も好く行かぬ勝でごわした。生活も大祖父様よりは遙か好うごわせなんだ。祿に面白い目も見さッしやらず、唯最う財産を潰して了はしやッたゞけでごわした。御覽じろ、今日何一つだッてあの方の遺物らしい物はごわせんぢやないか——銀の匙一本、あの方から傳はつた物がありましねえ。今日此のやうに何もかも揃つて居りますのは、眞實グラフイーラ・ペトローヴナ様のお蔭でごわすわい。』

『それは然うだが、併し斯云ふ事は本當なのかい』とラヴレッキーは言葉を挾んで、『あのそれ皆が彼女を鬼婆と云つて居たと云ふ事さ』

『何奴が一體あの方をそねえに云ひましたゞ』とアントンは不快な樣子をして答へた。

『したが、若旦那樣』と爺さんは或日辛との事で訊ねた。『奥樣あ何うして御座つしやるだね。一體奥樣は何處に暮したいと被仰つてゞごわすね』

『俺は彼女と別れて了つたんだよ』とラヴレッキーは努めて答へて、『まあ好いから何うか、彼女の事は訊かないで居て貰はうよ』

『はい、畏まりました』と爺さんは悲しさうに答へた。

三週間の後、ラヴレッキーは馬に乘つて再び〇ー市へ行き、カリーチン家を訪づれた。そして一夕を其家の人達と過した。レムも居た。ラヴレッキーは非常にレムが氣に入つた。父のお蔭で樂器は一つも行れなかつたが、彼は音樂、殊に本當のクラシカルな音樂を酷く好んだ。丁度其晩はバンシンがカリーチン家へは來て居なかつた。知事の命令で何處か田舍へ派遣されたのだ。リーザは獨りでピアノを彈いた。而も非常に手際が好かつた。レムは元氣付いて熱した餘り、一枚の紙を卷いてそれを振廻しながら指揮した。マリヤ・デミトリエヴナは

其様子を見て始めは笑つて居たが、終には堪らなくなつて寐床へ引込んで了つた。自分ではベートーフエンは餘り神經を亂し過ぎると云つて居るのだ。眞夜中になつてラヴレッキーは、レムに連れられて其の宿へ行き、朝の三時まで其處に居た。レムは盛に話をした。曲つた脊を伸ばし、眼を大きくして光らせた。額に懸つた髮の毛は逆立つた。人から同情を受けるのも彼には久し振の事なのだ。ラヴレッキーが彼に心を寄せて居るのは明らかな事だ。彼は同情の籠つた熱心な質問を次々に試みた。それが又酷くレムの心を動かした。終には自作の曲まで持出して見せた。そしてそれを彈いて聽かしたり、更に其中から拔萃した個所を衰へた力の無い聲で唄つて聞かせたりした。曲の中には「フリドリン」と題するシルレルの物語歌を全體作曲したものもあつた。ラヴレッキーはそれを賞めて幾度も其の妙所々々を唄はせて聞いた。別れる時其中二三日泊る意で自家へやつて來ては何うかと勸めた。レムは町端まで送つて來たのだが、早速それに同意し

た。そして情を籠めて對手の手を握つた。併し獨跡に殘つて、日出時の新鮮な濕りした空氣の中に立つた時に、彼は周圍を見廻し、身を震はせ縮み上がるやうになつて、何か罪でも犯した人のやうな格好をして自分の小さい部屋へ匐上つた。

『イヒ ビン ウオール ニヒト クルーグ(俺は氣でも狂つた方が好いんだ。)』彼は丈の短かい堅い床の上に寐轉んだ時に斯う呟いた。二三日してからラヴレッキーが馬車で連れに來た時に、彼は病氣だと云つて斷らうと思つて居たが、行成部屋へ入つて來られて遂々説伏せられて了つた。殊にレムの心を動かすに與かつて力のあつた事は、ラヴレッキーが彼の爲めにピアノを贈るやうに町で注文したと云ふ事實であつた。二人は先づ連立つてカリーチン家を訪ねて、皆と一緒に其の晩を過した。が、此間の晩のやうには愉快ではなかつた。バンシンが居て、べら〳〵と此間中の旅行の話を喋舌つた。興に乘つて手眞似足眞似で會つて來た田舍紳士の話を行つた。ラヴレッキーは笑つて聞いて居だが、レムは隅つこに居て話の方

へは出て來なかつた。默つて坐つたまゝ、蜘蛛のやうな格好に身體中をぶる〳〵震はし、懶さうな氣難しい顔をして居た。そしてラヴレッキーに歸らうと云はれて始めて我に歸つた樣子であつた。馬車に乘つてからも、老人は未だ羞んで固くなつて居た。併し暖かなふつくりとした空氣、そよ吹く軟風、朧げな物の影、青草や赤楊の芽の匂、穩かな星明、月の無い夜、愉快さうな馬の足音や鼻息――凡てそれ等の春の夜路の得知れぬ快さは、次第に此の哀れなドイツ人の胸に沁込んだ。で、終には、自分の方から先に口を切つてラヴレッキーと話をするやうにまでなつた。

二十二

彼は音樂に就いて、リーザに就いて、更に又音樂に就いて談し始めた。リーザの事を云ふ時に彼は一段と言葉を云澁るやうであつた。ラヴレッキーは彼の

作曲の方へ話の方向を變へた。そして戯談半分にリブレトーを書いて下れないかと云つた。

『ふむ、リブレトー』とレムは答へた。『いや、それは私の柄ぢや無い。私には今は最う元氣も無けれは、想像力も無い。所が、オペラには其の二つが無くてはならんのです。私は餘り自分の力を失くし過ぎたのです……だが、それでも未だ何か出來るとすれば――まあ歌くらゐで滿足しとかにやならん。無論美しい言葉は私も好きですからねえ……』彼は話を止めて、稍暫く凝と身動ぎもせず空を仰いで坐つて居た。

『例へば』と終に彼は云つた。『一寸まあこんな風に、「あはれ星よ、汝清らなる星よ」』

ラヴレッキー心持彼の方に顏を向けて、其の樣子を眺め込んだ。

『「あはれ星よ、汝清らなる星よ」』とレムは同じ文句を繰返して『「正しきも正しか

らざるも、汝の眼には隔て無し……さあれ唯、心の清き者ばかり」――まあそんな風なものをだ――「汝を解す」――と云ふのは、いや矢張――「汝を愛す」の方が好い。何うせ私は詩人ぢやない。到底も比べ物になりつこはない。だが、それらしい所は有る――何所か斯う高尚な所は有る』

レムは帽子を頭の背後の方へ押遣つた。晴れた夜の朧な曉明の裡に、彼の顏は毎もより若く見えた。

『「斯くて又汝は」』と彼は唄ひ續けた。聲は次第に沈んで行く。『「汝は愛する者を知り、愛し得る者を知る。そは汝、心清き者よ、汝のみ彼を慰め得べければ。」……いや、未だ是れぢや十分でない。だが、私は何うせ詩人ぢやないんだ。眞の少しばかりそんな事を行つて見るくらゐのもんだから』

『僕も何うも情無い事には詩人ぢや無い』とラヴレッキーは言葉を挾んだ。

『何うせ空な夢なんですよ』とレムはそれに應じて、馬車の隅へ身體を埋めた。

そして眠たくなつたと云ふ風に眼を閉ぢた。

數分間が過ぎた……と、ラヴレッキーは聞耳を立てた……「星よ清らなる星よ、愛よ」と老人は口の中でぶつ〳〵云つて居る。

『愛』とラヴレッキーは獨りでは對手の言葉を繰返した。そして物思ひに沈んだ――次第に胸が迫つて來る。

『クリストファー・フエードリッチ、貴方の例の「フリドリン」に附けられたつて、あの曲は實に好い曲ですね』と彼は聲高く云つた。『だが何うでせう。公爵の紹介で公爵夫人にフリンドリンが會つた後で、直に最う夫人の戀人になつたんぢやないですかねえ』

『そりや貴方は』とレムは答へて、『多分經驗から……』と云懸けてはたと言葉を切り、妙に躊いた樣子で外方を向いた。ラヴレッキーは努めて笑つたが、矢張眼を外して沿道の景色を眺め初めた。

星はだん〳〵白くなつた。馬車がヴシリエヴスコーの小さい家の入口へ着けられた頃には、空は灰色になつて居た。ラヴレッキーは特に用意して置いた部屋へ客人を案内して、自分は書齋へ歸り、窓際に腰を下した。花園では夜鶯が夜明け前の最後の歌を唄たつて居た。ラヴレッキーはカリーチン家の花園でも夜鶯が鳴いて居た事を思出した。あの時、初めの一聲が聞えるとリーザの眼には穩かな動搖があつた、と、其眼は暗い窓の方へ向けられた——ラヴレッキーは今又其の眼を思出した。彼はリーザの事を思ひ初めた。苦しい胸は次第に鎭つて來た。

『無垢な處女だ』彼は稍聲高く呟いた。『清らかなる星』と笑顔で云足して、心靜かに寐に就いた。だが、レムは永いこと床の上に坐つて、膝の上に樂譜を載せて居た。美妙な、耳に聞えぬ曲調が自分を魅しつゝあるやうに感じた。何時となく彼は熱し切つて居た。何時となく、其の得知れぬ妙調の迫つて來る疲れと快さ

とを感じて居た……が、其の心境も極點に到らずして空しく消去つて了つた。

『俺は詩人でもなければ、音樂者でもないんだ』斯う彼は最後に呟いた……そして疲れた頭を懶さうに枕に埋めた。

二十三

翌朝、庭の菩提樹の陰に主客相對して茶を喫した。

『作曲家先生！』斯うラヴレッキーは唐突に云つて、『其の中、貴方は祝の歌を作らにやならん事になりますね』

『何んな事の爲めにです』

『パンシン君とリーザの婚禮の爲めにさ。昨日あの先生がリーザに氣を揉んでたのをも氣が付きませんでしたか。何だか最う、好く事が運んだやうな風だつたちやないですか』

『斷じてそんな事にや成りませんよ』とレムは叫んだ。
『何故です』
『不可能の事ですからなあ。縱し』と云半して一寸言葉を切り、『何んな事でも此世で出來ん事が無いとした所で、あれだけは。就中此のロシヤの貴方々の間では』
『ロシヤと云ふ事はまあ暫く問題外にしときませう。それで貴方が此の結婚が好く行かぬと被仰るのは、何か理由があるんですか』
『總てが好けないんです、總てが。何しろリサウエータ・ミハロヴナさんは、見識の高い、眞面目な、高尚な感情を持つたお娘です。所が、あの男……あの男は一言にして云へばデイレッタントですからなあ』
『それでも彼女があの男を戀したとしたら』レムはベンチから起上つた。
『いえ、あのお娘が、あの男なんか思ふやうな事があるもんですか。と申すのは

あのお娘は實に情に於ては純潔で、そんな……戀なぞ云ふ事は些しも知つて居なさらんのです。カリーチン夫人があの男は立派な青年だと被仰つたので、お母樣の被仰る事だからと云ふので、それに從つて居らつしやる。歳は十九だが、未だ眞のおぼつ子だからそんな事になるのです。其所で御自分でも朝に晩に祈禱をして居らつしやる――それは誠に結構な事です。ですが、あの男を愛してるなんてそんな事は有りません。あのお娘は高尚な者で無ければ愛しはなさいません。所であの男は高尚で無い。竟りあの男の心に高尚な所が無いのです』
レムは初めから終ひまで息をも繼がず、上氣して語つた。談しながら彼は、テーブルの前を彼方此方と小股に往つたり來たりして、眼を地面に走らせて居た。
『ね、先生！』とラヴレッキーは突然叫んで、『何だか貴方御自身が僕の從妹を愛して居らつしやるんぢやないですか』
レムは其の言葉につと立留つた。『何うぞ』と不確な聲で口を切つて、『何う

ぞ戯談は御免蒙ります。私は狂人ぢやありません。私は最う暗い墓の方へ向いて居る人間です。華かな未來のある人間とは違ひます』

ラヴレッキーは此の老人が氣の毒になつて來て、それは濟まぬ事を云つたと謝つた。朝茶が濟んでからレムは自作の曲を奏した。が、晝飯の後では、ラヴレッキーの發言で又もやリーザの話をした。ラヴレッキーは注意と好奇心とを以て、對手の話を聽いた。

『何うですかねえ、クリストファー・フエードリッチ』と終に彼は云つた。『御覽の通り、此處も今では萬事が整頓して、花園の方も丁度花の盛ですから、此の機を利用して、リーザを一日招待しやうぢやありませんか、彼女のお母さんも、それからあの年寄の僕の伯母も……え？何うです』

レムは皿の上へ頭を屈めて、

『それは是非』と聞取れぬ程な聲で云つた。

『だが、パンシンは呼ばなくても可いでせうね』

『左樣、あの男は用はありません』と老人は如何にも子供らしい笑顔で答へた。

其話があつてから二日經て、フエードル・イワーニチはカリーチン家の人達に會ひにと町へ出懸けた。

二十四

行つて見ると、皆家族は打寛いで過つた。が、彼は直には自分の企てを皆に打明けなかつた。先づリーザにだけそれを話して見たいと思つた。都合よく客間に二人だけを置いて下れた。二人は種々の話をした。リーザは初めて彼と打解ける時を得た。尤とも何人に對しても、然う羞まないのはリーザの常なのだ。ラヴレッキーはリーザの言葉を熱心に聽き、其の顏を見ながらも、心の中ではレムの云つた言葉を繰返して、其の言葉を成程と思つた。交はりはあるが、併し未だお互

に親密な言葉を交合ふ程にはなつて居ない二人の人が、往々にして二三分の間に急に親しくなり、其の急に増した親しさの意義を即座に、お互の眼や、優しい情の籠つた笑顔や身振に現し來る事があるものだ。ラヴレッキーとリーザの間も正しく是れであつた。『あゝ、斯云ふ方なの』女の方では斯う思ひながら、親しげな眼付を男に向ける。『あゝ、斯云ふ女なんだ』男の方でも矢張然う思つて居る。で女が、今まで貴方に口を利きたかつたのだけれど御迷惑になるかと氣遣つて居たのだ、と云ふ事を云惡さうに云つたのに對しても、男の方では左樣意外にも感じなかつた

『何あに、そんな氣遣ひはありませんよ。何でも被仰い』斯う彼は答へて、矢張女の前にちやんと立つて居る。

リーザは澄んだ眼で見上げて、

『貴方は本當に好い方ですのねえ』と口を切り、それと同時に心の中でも、『眞

實善い人だ』と思つて居る……『こんな事を申すのは誠に濟まない事なのですけれど……よくまあ……いえ、何んな譯から貴方は奥樣とお別れなさいましたのですの』

ラヴレッキーはぎくッとして、思はずリーザの顔を見た。そして其の傍近くに座を占めた。

『リーザさん』と彼は口を切つて、『何うぞ其の傷には觸らんで置いて下さい。幾ら貴女の手が柔かでも、矢張僕は痛いんですから』

『妾存じて居ますの』と對手の言葉を耳に入れぬらしく、リーザは言葉を續けて

『奥樣は貴方のお顔に係るやうな事をなすつたんですつてねえ。妾だつて、何も奥樣の辯護をしやうと思ふのではありませんけれど、神樣の結んで下すつたものを、何うして貴方がお割きになる事が出來ますでせう。』

『いや、其の問題に就いての信念は、お互に大變違ふんですよ。リサウエータ・

ミハロヴナさん』と幾分鋭く云つて、『それはお互に解する事が出來ないんです』

リーザは顏を蒼くして、全身を微かに慄はせて居る。それでも默つては居ないで、『貴方から赦してお上げにならなければなりませんわ』と穩かに云ふ。『若し貴方も赦されたいとお思ひなさいますのならば』

『赦す？』とラヴレッスーは對手の言葉を云消して、『何よりも先づ、貴女は誰の爲めに仲裁して下さるのか知て下さらなけりやならないぢやないですか。あの女を赦して僕の家へ連戻す、あんな空虛な人情も何も辨へないものをですか。それに、彼奴が僕の所へ歸りたい心があるなんて、貴女は誰からそんな事を聞いたんです。彼奴はあの儘で十分滿足してるんです、それに最う違ひは無いんです……そんな事は今更此處で論ずる問題ぢやありません。最う二度とあの女の名は口にして下さるな。貴女は眞實滿過ぎるので、あんな者の心は到底も分りはなさ

らないんですよ』

『何故そんなに酷く被仰るの？』とリーザは努めて明瞭と聞えるやうに言つた。手の慄へて居るのが見えるやうになつた。『貴方は御自分の方からあの方をお捨てなさいましたのねえ。フエードル・イワーニチ』

『ですがね』とラヴレッキーは到底も我慢が爲切れなくなつて、强く云返して、『貴女にはあの女の正體が分らないんですよ』

『では何故そんな方と御結婚なすつたの？』とリーザは小聲で云つて、眼を下に向けた。

ラヴレッキーは突と席から起上つて、

『何故僕が彼奴と結婚したかと被仰るんですね。そりや、僕が若くて無經驗だつたからです。僕は欺かれたんです。外形の美しさに迷はされたんです。僕は女は一人も知らなかつた。僕は何事も知らなかつたのです。僕の事はまあ何うでも好

いとして、貴女なんかは何うかまあ、幸福な御縁組をなさいまし。ですがね、何事もきちんと好く行くもんぢやありませんよ』

『そりや妾だつて不幸な目に遇ふかも知れませんわ』とリーザは云つた。聲の調子がだん〳〵亂れて來る。『ですけれど、そんな事になつても、妾はそれは耐忍ばなければならないと思ひますの。何だか言方が變になりましたけれど、眞實然うだと思ひますわ。で若しそれに耐忍ばないとしますと』

然う云懸けるのを聞いて、ラヴレッキーは手を捩ぢ足を踏んだ。

『何うぞお腹を立てないで下さいましな』とリーザは慌てゝ口籠つた。

折柄マリヤ・デミトリエヴナが入つて來た。リーザは起つて、其場を去らうとした。

『一寸待つて下さい』とラヴレッキーは思はずそれを呼留めた。『僕は貴女のお母様と貴女に、是非お願ひしたい事があるんです。何うでせう、僕の新宅へお

遊びにお來でを願ふ譯には行きませんかなあ。あの通りピアノは送らせてありますし、レムさんが來て居てはくれるし、紫丁香花は花盛りではあり、しますからねえ。それに田舍の良い空氣を吸つて、其日の中にはお歸りになる事が出來ますし……ね、お來で下さるでせう』

リーザは母の方を見た、母の顏には明かに當惑の色が見えた。が、ラヴレッキーは口を開かせる隙も無く其の手に接吻した。感情の表現に對して常に感應し易い性質のマリヤ・デミトリエヴナは、ラヴレッキーのやうな阿呆にこんな烈しい情の流露があらうとは思つて居なかつた所へ、突然こんな風にされたので、悉皆心が解けて了つて、其の場に招きに應ずる事となつた。其所で何時にしやうかと日を定めるのに思案して居る間に、ラブレッキーはリーザの傍へ歩み寄つて、酷く心の熱したまゝ耳元近く叫いた。

『有難う、貴女は眞實好いお娘です。僕は大に恥入りました』